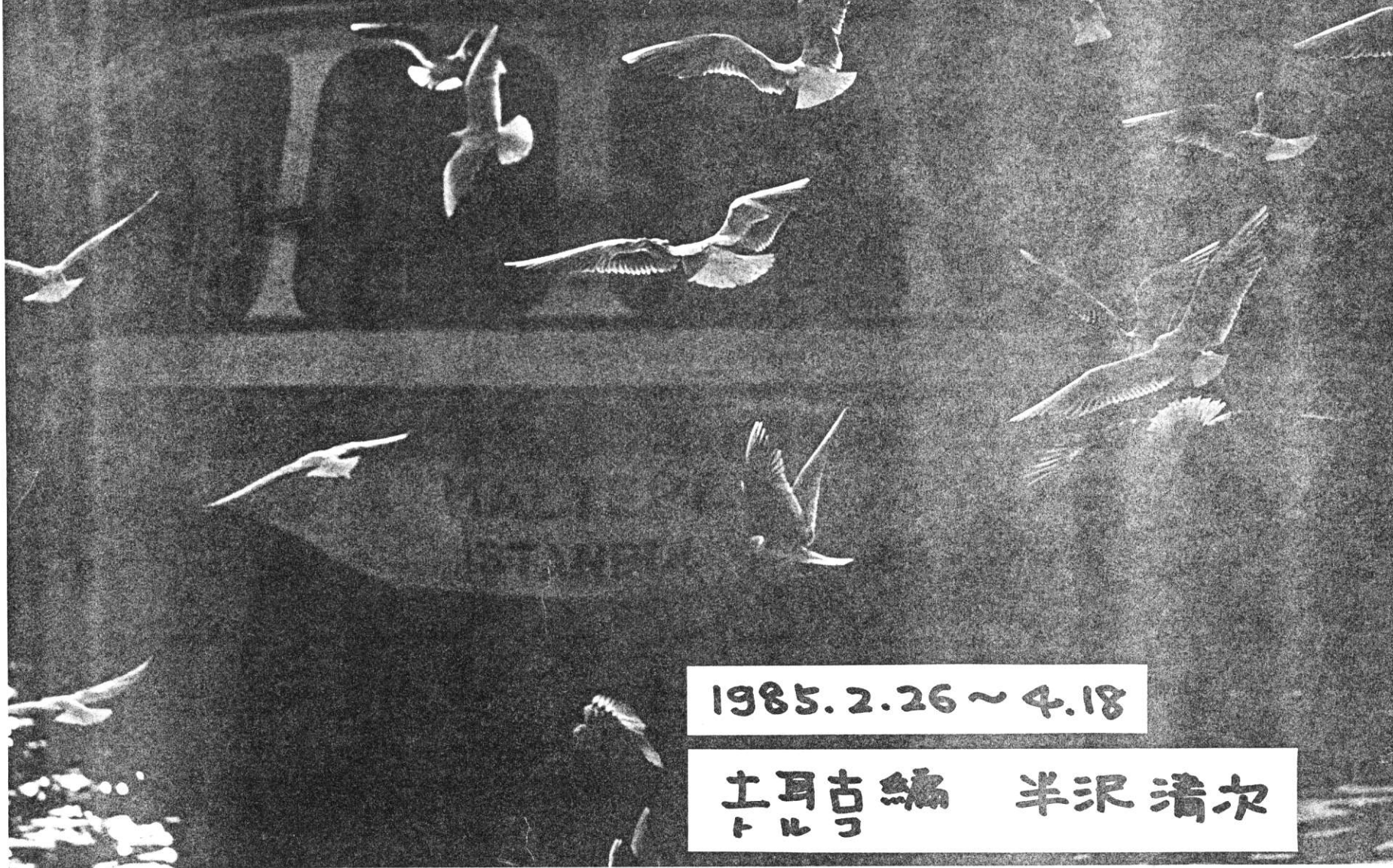


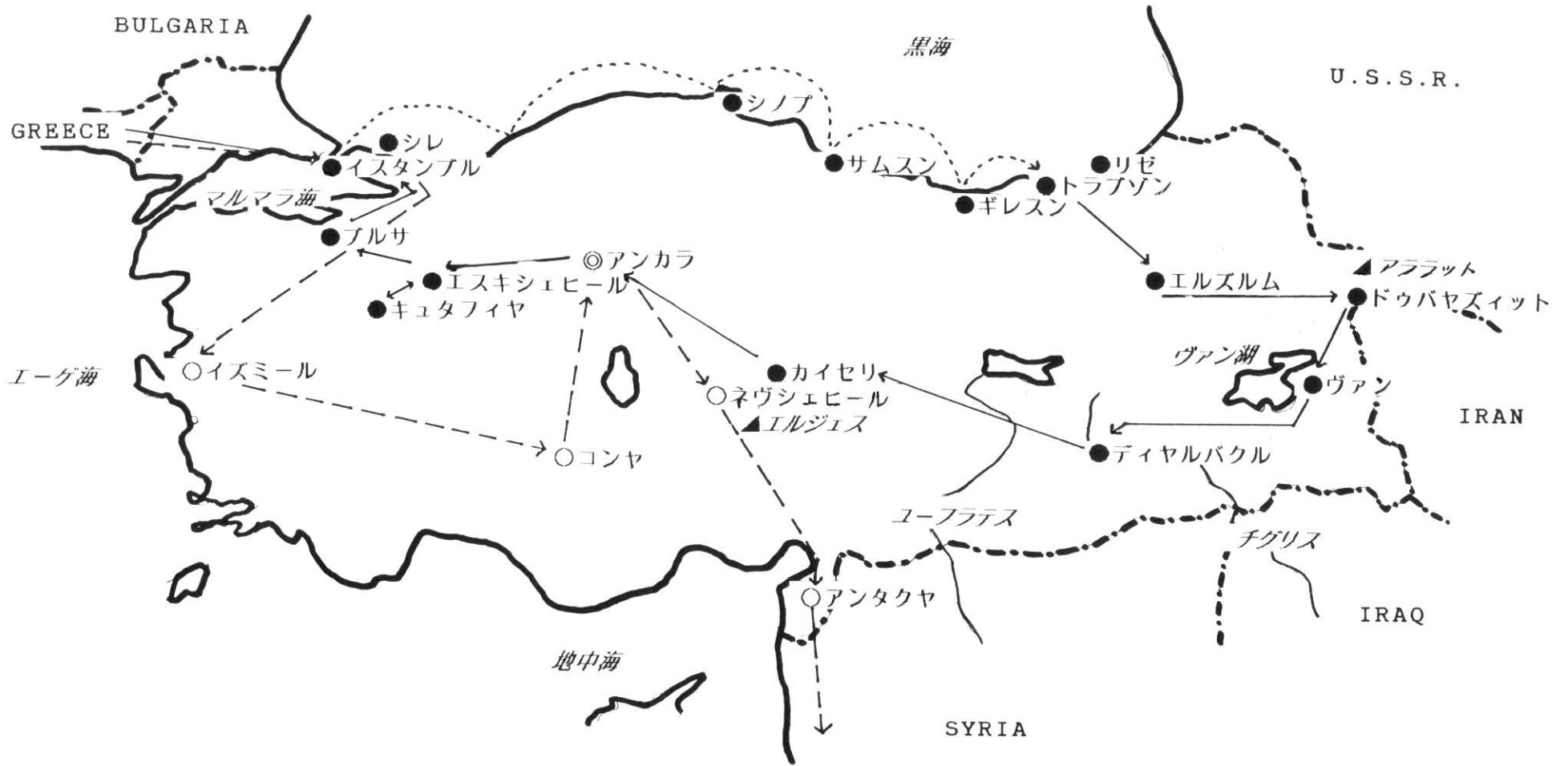
# 東の大地西の空



1985. 2. 26 ~ 4. 18

土耳古編 半沢清次  
トルコ

# TURKEY



..... → 1985. 2. 28 ~ 4. 10

----- → 1980. 8. 3 ~ 8. 26

一九八五年二月二十八日、アテネ発07:30のオリンピック・エアウェイは、イスタンブール空港に向かって降下していた。機が高度を下げるにつれ、トルコの大地が迫ってくる。予想以上に雪が多い。一面雪野原の中に、除雪された一本の滑走路が目に入った。

一九八十年八月三日、同じアテネから陸路で、バスとヒッチを使いイスタンブール入りした。当時トルコは、極度のインフレによる経済不安と、一日に十数人が暗殺されるというテロの横行に脅かされていた。無血クーデターが起こったのはこの年の、私たちがトルコを離れたわずかひと月後である。新市街の中心タキシム広場には、威嚇的に戦車が常駐していたし、街には兵隊が多く目についた。

だがイスタンブールの街は、そんな不穏さを忘れさせるほどの、したたかな活気にあふれて見えた。今も脳裏に焼きついているのは、真夏の暑さと街の喧騒………物売りの呼び声、靴磨きの少年、水売り、積み上げられた果物、羊の肉、白いチーズ、人人人、車車車。

今回のトルコ旅行の前に私は、図書館で毎日、朝日、日経の縮刷版をめくり、過去一ヶ年のトルコ関係記事を搜してみた。しかし驚いたことに、見付かったのはそれぞれ二、三件、それも小さなものばかり。日本人はトルコという国をなにも知らない。そう思った。

出発前、今回はひとり旅という不安もあって、普通では手に入らない抗生物質が買えないかと思ひ、有楽町の交通会館―ここには東京都の旅券交付事務所がある―の中の薬局に寄った。以下店員との会話。

H「抗生物質は買えないでしょうか」

店員「医師の証明がないとお売りができませんが、何にお使いですか」

H「こんどちょっと長い旅行をするもので」

店員「はあ、どちらへ」

H「トルコです。田舎のほうまで行くもので、少し心配で」

店員「ちょっと考える。ふと、後ろを振り返り、薬の並んだ棚から一つのパッケージを取り、私の前に置く」

「ヒニョウキケイでしたら、これがよいです。一般的なのはリンシツですが、数週間連続投与していただいで、云々」

私は最初理解できなかった。ヒニョウキケイが泌尿器系であり、リンシツが淋疾であると解ったのは、パッケージを手に取り、効能書きを読み終えてからだだった。

H「エッ、オッ、アッ」

私は若干汗をかきながら、「いえ、結構です。どうも」と、いって出てしまった。

あの店員は、私の言葉が何かの暗号に聞こえたのだろうか。

そして、一九八五年二月二十八日、私は再びトルコにやってきた。イスタンブールは未だ冬だった。

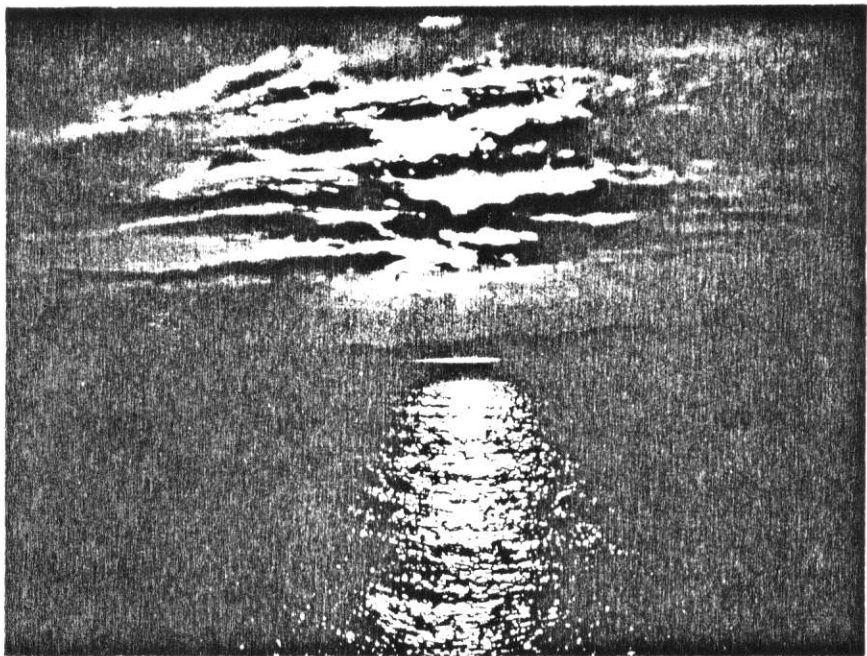
## トラブゾンへ・・・黒海フェリー

三月七日、十時出航予定の船は、大幅に遅れてガラタ橋近くの棧橋に横付けされた。船は結構大きい。車が何台もクレンで積みあげられる。フォードの九人乗りのワゴンは新車だ。トルコでは短距離交通機関は専らこいつが活躍している。船積みも終わり、出航したのは昼も回っていた。イスタンブールに着いた当日、動いているかどうか分らぬ黒海フェリーを調べるため、雪どけでドロになった道を歩き、トルコ海運のオフィスを探した。そして、そのインフォメーションにいたトルコ美人に聞くと、ちょうど船は一週間先の木曜に便が出るという。予約を取ることにした。

「一番安い部屋。ひとり。」

カウンターの向こうで、ヨーロッパ系の顔をした人のよさそうな男は、船のランク表をみせて値段はこれこれ、いいか？と、聞く。思いの他安い。チケットを作る段階で電話をかけたなり、なかなかで結局最安の部屋はいっぱい、ワンベッド・ワンキャビンの個室になってしまった。それでもトラブゾンまで四千五百トルコリラだった。これさえ手に入れてしまえばあとは一週間、五年ぶりのイスタンブールを満喫するだけだ。トルコに慣れるため、そして南回りの長い飛行機のせいで狂ってしまった体調をもどすのにちょうどよい待ち時間だ。

冬の船旅ほど退屈なものはない。デッキからゆっくりと通り過ぎる島影を眺めていたり、見渡す限りの海の色をなんとなく眺め続けていられる時間は悪くはないが、三月始めの黒海はしんと冷えた空気に包まれていた。海岸線が近づくとその地肌はどこもまだ雪に覆われ白く輝いている冬のせいか、妙に静かな海だ。鳥もめつたに見ない。他の船にも会わない。フェリーはゆっくりと東に向かって進んでいった。



船室、101は前甲板の地下二階か三階にあった。ベッドの頭のほうに向かつてすばまっている形からして、船の左舷最前らしい。個室には違いないが、随分と狭い。しかも、トップライトが壊れていてうす暗い。キャビンまで案内してくれた船員は、なんとかかんとかと、いったまま音沙汰ない。ベッドサイドのライトを上に向けてしのぐことにした。

それにしても出航一日目の夜は寒かった。スチーム管はまていのにさっぱり暖まらない。私は日本で準備していったトルコ語会話のノートを引き取りだし、スチームの取手に書かれた文字の判読にかかった。どっちに回せば『暖』かが分れば、OKだ。メモの『熱い』と『寒い』が、すぐに当はまった。《スジャク》が暖かい方で、《ソウク》が冷たい方だ。しかしそっちに一杯に回しても暖気のでる気配はまったくない。だが、お陰でトルコ語の単語をさっそく二つ覚えてしまった。

ところで、船に乗る前私はもう一度トルコ海運を訪れている。船の中で飯が食えるのかどうか心配だったし、トラブゾン着の正確な時間を知りたかったからだ。私はまたインフォメーションの美人に聞いてみた。

「船の中に食堂あんの？」

「一等室のお客さんは食事付きだけど、あんたはどうなの？下のクラスは食事は込みじゃないからね。食堂で食べようと思えば食べられるけど、安くあげたいのなら何か持って乗ることね」と、彼女は笑いながら教えてくれた。私は大きなズッシリと重いパンとオレンジ1kg、ネスカフェの分厚いチョコレート二枚持って乗りこんでいた。

とはいうものの、食堂で暖かい飯が食えるのならそれに越したことはない。船がボスフォラスを抜けるころ、私はダイニングルームに行きテーブルに着いた。すでに二・三人が食べている。ななめ向かいに座った男はなにかチケットのようなものを持っているので、それはなんだ？と、指を差して聞くと、船の中では金の代わりにこいつを使うらしいことが分る。私は聞いて上のロビーにチケットを買いにいった。そして、50TL（トルコリラ）と100TLがセットされて250TLになったものを四つ手渡され、1000TL払い、食堂にとって返した。

私は前の男と同じものを注文した。羊の肉の小さな薄いステーキ二切れに付けあわせ少々。ピラフ・パン・水。幾らだか分らないので、チケットをそっくり置くと、ピシツとした身なりのウエイターは数えるふうでもなく、まとめて千切り持って行ってしまった。これはなにもボラれた訳ではない。向かいの男は1000で足りないらしく、隣の男に少し借りていた。「なんでそんなに高けえんだ、くそ！」とかなんとか言いながら肩をすくめ、手を広げて渋々払っていたが、私もまったく同じものを頼んだのだからこっちは言葉の分らん人間にいちいち面倒と、負けてしまったのだろう。ともかく私はこれ以後、食堂には足を向けることはなかった。

	pl.	arr.	dep.
ISTANBUL			10:00
ZONGULDAK		22:00	23:00
SINOP		13:00	14:00
SAMSUN		21:00	23:00
GIRESEN		08:00	11:00
TRABZON		17:00	



船はこの後ソ連国境に近い町ホパまで行き、再びイスタンブール目指して帰りの航海を続ける。私はトラブゾンまでである。

私の乗った船の名前はAKDENİZ（アクデニス）。これはトルコ語で地中海を意味する。何で黒海に行く船が「地中海」なのだから分らないが、ちなみに「黒海」のことをトルコ語ではKARADENİZ（カラデニス）と、いう。KARAは、黒。AKは、白。DENİZは、海。船名に気づいて、また三つトルコ語を覚えた。

船に持込んだパンは、普段食べるトルコパンよりもしつかりした塩味のきいたパンでとてもうまい。オレンジは最高。だがシノプで停泊中、町のロカント（食堂）で一度食べた意外、ずっとパンとオレンジとチョコレートでは、いくら安上がりだとはいえ飽きた。そして、暖房の件について言うならば、最初の日は寒くて「このボロ船が！」などと罵りながら一枚しかない毛布ではとても足りず、前の旅でも使うことのなかったレスキューシートにくるまり、服も着たまま寝てしまったが、翌日は蛇口から期待しなかったお湯はでるしスチームもはいつて、快適とはいえないまでも海の上の我家としては上出来の航海となった。

三日目の夕刻、船はトラブゾンの町が見えるところまで来て沖に停泊してしまった。まだ日のある午後四時頃少し陸に近づいたものの接岸せずそのまま日は落ち、町の民家に灯が入ってしまった。

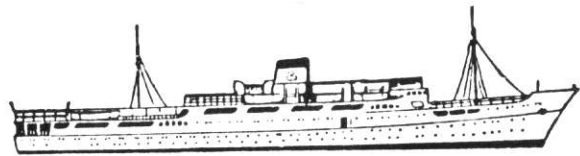
外国を旅していると、こんな訳の分らないことにしばしばぶつかる。そのほとんどの場合、その国の言葉が話せない為の情報不足からくるもののだが、大抵の場合なんとかなるものだ。七時過ぎ、船はようやくトラブゾンに入港した。



船はイスタンブールを出航した後いくつかの港に寄っていくのだが、そこでの停泊時間が一〜三時間ほどある。その間は船から出て町に買物に行こうが、飯を食に行こうが勝手なのだが、タラップの下りている場所にある大きなベニヤの時計の針が指している時刻までに戻らないと、帰らぬ人間はそのまま置き去りにされてしまうだろうから、あまり訳の分ぬ旅行者はそう遠くへは行けない。それでも、ギレスンという町に着いた時は町がすぐ近くで、また気持ちの良い朝でもあったので私は見物に出かけた。開店まもないチャイ屋さんでトルコ紅茶を飲み、ひとごちついたあと、町を歩いていると楽器屋さんがあった。ウインドウの奥には胴の脹らんだ民族楽器がぶらさがっている。店の前では男が二人チャイを飲んでた。私は楽器の名前を聞いたたり、「イスタンブール ソウク・ギレスン スジャーク」などと、覚えてたのトルコ語で話をして結局、チャイ二杯とビスケットを御馳走になってしまった。



チャイ屋の親父／ギレスン



## イマームの息子

ようやく上陸とはいったものの既に日は落ち、手持ちのガイドブックにもトラブゾンの町の地図は載っていないため港が町の中心からどのくらい離れ、また位置はどのなのだかさっぱり見当がつかない。そんな時には人に聞くしかない。

「パルク・メイダン ネレデディル？」

私はトルコ語で『経済的な宿が多い』と、本に書かれていた場所をゲートの守衛らしいおっさんに聞いて聞いてみた。おっさんは、前に行く男にどなった。

「おい、こいつをメイダンまでつれて行ってやってくれや。」

私は、ほっとしてヒゲづらの男について坂道を上っていった。

トルコでは人に道を聞いたりすると、その場所まで一緒についていくことができることがよくある。彼等が暇なのか、通じもしない言葉で言っても分らんだろうと思うのか、あるいは昔からそういう慣習のようなものになっているのかは知らないが、結構離れた所でもその前まで行き、はいここですよ。と、つれていってくれる。前の旅でまだ様子が飲込めていないころに道を聞いたら「いっしょに行こう」と、言って歩き出したのはいいが、だんだん路地裏のような所へ入って行き、「おい、ちょっとやばくないか？」などと、カミさんといぶかしがりながらついていったものだが、なにも心配することはなかった。

私は坂道を男について歩きながら、だんだんとトルコの感触を思い出していた。

トラブゾンの町に雪はすでない。大きく作られたガラス窓一杯に、黒海が広がっている。ホテル オズギュル。一泊だけなら空いていると言われ、ちょっと高かったが他を探すのも面倒だしと、泊まった宿。ツインの部屋にバス付きで一人ではもったいないようだ。だが、バスはタイルで新しく作り直したらしいが、セメント屑だとかタイルのメジがとんで浴槽にこびりつき、白い粉が一面を覆っている。修理したばかりにしろ、掃除もせずにそのまま客に貸してしまうなんぞトルコらしい。私はさしてこういうことが気にならないからよいものの、いつも高級ホテルに泊まっている人はこれだけで文句を言うだろう。ましてここは安宿ではない。しかし、わたしはお湯さえ出れば満足だ。

朝、シャワーを浴びて、窓際の椅子に腰掛け黒海を見る。

『フォーム、とうとう来たか。それにしても昨夜食った安食堂のイシユケンベ チョルバスは美味かったな』などと思いながら、トルコタバコ「マルテペ」を口にくわえた。

さて、一泊だけの宿を出てもう少し安そうなホテルに移り、とりあえず町に出ることにした。

私はホテルに置いてあったパンフのあまりあてにならない地図を頼りに、アヤソフィア寺院という、13c頃の建造物を目指して歩き始めた。工事中の道路を少し行くと腹がへってきた。カウスター式のスナックを食べられる店で、チーズドックとオレンジジュースを頼む。

トルコの町では、いたるところにこのような軽食が食べられる店やスタンドがある。ドックはクラブサンドのように、ペったんたんに焼くのだが、中身はチーズ・ソーセージ・サラミ・トマト・貝の揚げたのするなど、場所、都会、地方それぞれだが、ともかく食うことには困らない国

だ。もちろんジュースは生。それもその場でオレンジ3・4ヶ、コップ一杯しほってくれる。そうだドネルケバパンもある。うまいもの話はきりが無い。



腹ごしらえして歩く。ちょうどその日は日曜日だった。トルコでもサッカーが盛んで、途中にあるスタジアムでは試合が行われるらしく大勢の人が集まっている。協のグラウンドでは選手が練習している。そういえば昨日泊まったホテルにはウェアを着た人間がたくさんいた。彼等のおかげで私は一日しか泊まれなかったわけだ。ま、それはいいとして私もしばし見学。"シミット"という、これまたトルコ中どこにもあるゴマのついた輪っかパンをひとつ買い、また歩きだす。町はずれになってきたが道がどうも地図と違う。私は少し前から気がついていたので、私の横を好奇心からか、ついて歩いてきた二人の男の子がいたので、声をかけた。

「アヤソフィアってどこ？」

トルコの子供にしてはめずらしく黒縁の眼鏡をかけ、皮のハーフコートなんぞ着た少年と、うっすらと口ひげのはえかかったのと二人。眼鏡の子がかなりブrouクンな英語をしゃべる。

「案内してあげるよ。」 同行者ができた。

あとで話して分ったのだが、この黒縁眼鏡がイマームの息子だった。

《イマーム》というのは、イスラム教の、まっ、偉い人なのだが、イランのホメイニなどもイマームである。日本では普通これを《聖職者》と訳しているが、『アラアの他に神なし、アラアの下に皆平等』のイスラムにおいては、中をとりもつ人間も職業としての宗教家もいないはずで訳として正しくないという。

彼と話しをしながら民家わきの畑を抜けると、見ただけで古いものとわかる落ちついた土色の寺院にでた。彼は「To Go!」と、いうのが口ぐせだ。ここはイスタンブールのアヤソフィア同様、かつて一度イスラム化された後、保存されている建造物なので入場券を買わなくてはならない。彼は、「いい 僕がだす」と、いってさっさと切符を買って入ってしまう。

中は壁面、あるいは天井にキリスト教時代の素朴な絵が残り、私は五年前見たカッパドキアの岩をくりぬいてつくった一大穴居都市を思い出した。時代的に近いのか、その壁画の感じがよく似ていた。

トラブゾンの町は海より一段高いレベルにある。そのアヤソフィアを裏にまわると、黒海が一望に見渡せる庭に出る。夏期にはテーブルと椅子を置き、チャイが飲めるらしい。

そこで話かけてきた青年がいた。まだ高校生くらいだが、彼の左右の耳はつぶれている。青年は身振り手振りで、レスリングをやっている、そのタックルで耳がつぶれているんだと、言う。

トルコでは昔からレスリングが盛んで、日本でいえば相撲のようなものだ。本来のトルコ式レ



スリングは、いわゆるグレコローマンスタイルの上半身だけの攻撃らしいのだが、身体中オイルを塗って、しかも掴まえないように頭もそって、頭のてっぺんからオイル漬けにするらしい。昔、日本のプロレス界にはレフリーをやっていたユセフ・トルコという人がいたが、彼などその出身なのだろう。しかし現在、競技にしる興行にしる目に付かないし、サッカーにおされて人気がないのだろうか。今だ見る機会はない。

アヤソフィアを出るとき絵ハガキを一枚買った。と、いつてもまたしてもイマームの息子は、「僕が出すよ」と、こちらを押しとどめる。したがって、買ってもらった。町のほうに戻って歩こうち、一人のばあさんこじきが手を出していた。彼はポケットから10TL札を出して渡した。

私はだんだん様子がおかしくなってきた。それはイスラムの教えにもとずいている。イスラムの信者（ムスリム）は信徒として守らなければならないことに、《六信五行》というのがある。詳しくは書かないが、その五行の中に、「礼拝」とか「断食」があるのだが、「喜捨」というのもある。これは豊かな者が貧しい者に財産を分けあたえろと、いうことなのだが、これは貧乏人に限らず旅人・宣教師などにもあてはまる。これだ。イマームの息子はこれを実践しているわけだ。

トルコは近代トルコの父といわれるアタチュルク以後、国教としてのイスラムは廃止され自由信仰になり、かなり軽くなってきているのだが、現在も国民の99%はムスリムである。トルコにしるアラブにしる中東世界では時として思わぬ歓待を受ける。

彼は私に「あなたはビールをのむか？」と、聞く。私がうそをついて「いや飲まない」というと、彼は「Good」と、いった。

それ以後も彼に対して「喜捨」は続いた。お菓子屋に入ってビスケットの類とチョコレートプディングを買ってくれる。開いていない町のジャーミー（モスク）礼拝堂を見学させるために声をかけてくれ、ごく普通のきれいな小さいジャーミーを見ることができたのはともかく、その後がいけない。「腹へってないか？」と、聞く。「そうだな食べようか」というと、彼は一軒のわりと立派そうな店に入っていた。トルコのレストランは高級な店でも気軽に入れる。ただウェイターがきちんと背広を着ていて、テーブルにはクロスがかかり、値段は若干高く料理も少し上品になる。私は内心この食事をおごることに決めていた。ところが、私はドネルケバブを頼んだのに彼はというと何も頼まないのである。「食べないのか？」と、聞くと「腹へってない」と、とりつくしまもない。彼は私の左に座って、水だけ飲んでいる。ここは良い店らしく味もよくうまかったのだが、私は落着いて食うことができなかった。

『彼はここの金も払う気でないだろうか？』私は頭の中で策をめぐらせた。日本なら伝票をさつと取り、レジにむかってしまえばいい。トルコもほとんどレジ払いのだが伝票はない。タイミングがむずかしい。そして、案の定私が食べ終わると、彼は一瞬私より早く立ちレジに向かった。私はすぐ追って追い越して先に財布を出した。14才の子供の払う額ではない。

彼はこれから映画を見に行くという。これを機会に私達は別れることにした。これ以上一緒にいると何をおごられるかわかったものじゃない。いったんホテルに戻ることにした。私は写真を送るために彼の住所を聞き、日本から持っていった記念切手を手渡した。

私はホテルにもどってしばらくの間ベッドに寝っころがっていたが、まだ時間も早く、おまけにその部屋は寝るぶんには支障ないが居て楽しい部屋では全ったくなかった。

黒海にさわりにゆくことにした。適当に下のほうにゆけば国道を越えて海っぺりに出られる。裏道を行くと人だかりがしている。映画館だ。さっき別れたばかりの彼にまたあってしまった。

五時十五分からの上映でまだ時間がある。一緒に海に出た。もう一人10才位の子供がついてきた。「こいつは昼間、シミツト売ってるんだよ。」と、イマームの息子は教えてくれた。そういえばスタジアムの所で見かけたような顔だ。彼から買ったような気もする。

映画を私も見ることにした。客はというと大人はそういない。でも木の椅子はほとんどまっっている。私は売店へ行き瓶入りのジュースを三本買って彼等にも渡した。生のしほりたてのオレンジジュースと同じくらいの値段だからこのファンタもどきの飲物はかなり高い。前の席に座ったガキがタバコをふかしている。

映画は二本だてだが、これがメチャクチャおもしろかった。

タイトルはトルコ語でわからない。その一本は、いわゆるスリルとサスペンスのアクションもので黄金の財宝をめぐる正悪渡り合う。舞台がイスタンブールからカッパドキアに移り、その地下都市に黄金が眠っていることがわかるとギョレメの渓谷をカーチェイスで駆け抜けて行ったりする。さて、ロジャー・ムーアばりの主人公は地下の洞窟に入るが突如の地震で洞窟が崩れ、腕をはさまれてしまう。が、その地震のおかげで黄金の扉があらわれた。一方ロジャー・ムーアを助けにきた女が腕をはさんでいる木の柱を動かすと洞窟内から大量の砂が流れ、その比重差で黄金の扉が跳ね上がる。中にはお棺があるのだが『これを開けちゃなんねえ。ろくなことないで』と、書いてあったかどうかトルコ語だからわからないが、彼等はそのままにして出ようとすると、ところがそこに現われた悪漢、その棺を明けてしまう。すると、この中にもミイラのわきに小さな天秤があり、その一方に砂金が溜りだす。ゴッワー・ガラガラ・アーイツツ。悪漢死して、ロジャー・ムーア等は命からがら脱出する。ふと見ると相棒のおっさんの手には、棺のなかのミイラがもっていた大きなエメラルドのついた杖がしっかりと握られていた。…と、下手な文章で書いても面白くもないが、もう一本のほうは、デブッコと二枚目のコンビがくりひろげるトラック野郎もの。ドタバタ・コメディという感じだが、これも傑作だった。館内はやんやの喝采。言葉は分らなくともこのでの娯楽映画は心配いらぬ。日本で上映してもヒットすると思うのだが。

私はその後何回か映画館に入ったが、この時の映画が最もおもしろかった。



翌朝すぐ近くにあるインフォメーションへ行き、トラブゾン郊外の山中にあるスメラ僧院という140ピザンチンの僧院跡に行く道の情報を聞いたのだが、雪が多くタクシーは上まででは行かないという。下の道から歩いていけないこともないらしいが、結局あきらめる。

私はトラブゾンを離れることに決めた。ホテルにはもう一泊すると言ってあったのだが、もどってさっそくキャンセルした。荷物を持ち、カウンターで会計してもらっている時に昨日のイマームの息子がやってきた。彼は昨夜別れ際に、「十時頃ホテルに寄るよ」と、言っていた。登校途中らしい。カバンを持っている。私は彼に出発をつげた。

彼から貰ったり、おごられたりしたもの。

\*アヤソフィアの入場券

\*絵ハガキ一枚

\*チャイ

\*チヨコレートブディング

\*クッキー

\*サウジアラビアのコイン

\*テスビー

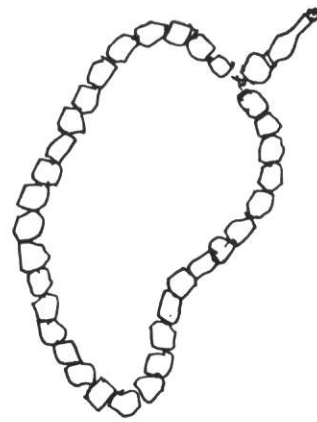
この「テスビー」について説明しなければならぬ。

トルコに行くときよく男の人が、日本でいえば「数珠」のようなものを手に持っているのを目にする。右に書いたような形をしているのだが、この玉をいっこいっこ指で繰って行って一周するとクルッと回して、これを繰返す。玉はプラスチックから貴石までピンキリだが、べつにジャーミーに行つて礼拝のときに使う訳ではなく、ごく日常、人と話ながら、チャイを飲みながらにげなくやっている。アラブではこれを「ゼブハ」と、よぶらしい。これは仏教の様式が後の時代に入ってきたものらしいが、詳しくは知らない。キリスト教のロザリオにしろ、宗教の共通性はさまざまなどころにあるものだ。そして、この「テスビー」と、ほとんど同じものを、隣の国ギリシアでも見ることができる。あの国はギリシア正教である。

私は彼のプラスチックのオレンジ色をしたテスビーをその後旅の間、お守りとしてジャンパーの内ポケットに入れておいた。

私はとても大切なものをもらったようだ。帰国後、彼に写真とちょっとしたプレゼントを送った。彼からは、メッカの写真入りの便せんに書かれた返事が送られてきた。

14才の少年から受けるにしては、私は旅人としても多くの「喜捨」を受けてしまった。彼もいずれイマームになるのだろう。





# ¥ お金の話 ¥



トルコの物価は安い。日本円対トルコリラ (TL) は1:2、つまり10円が20TLと考えれば大まかな計算はできるのだが、実際には1:4の感じで使える。例えば、イスタンブールの市バスは70TL (35円)、ソーセージやチーズのはさまったドックパン80TL (40円)、アイラン/ヨーグルト飲料50TL (25円)、ビール500ml位140TL (70円)、タバコ130TL (65円) といったように、ほぼ日本の4分の1といえる。無論、日本よりかなり高い物もあるが、この日本人にとって安いと感じる金銭感覚はトルコ人に対してはフェアじゃない。彼らの給料は安く、仕事を探すこと事態大変だ。以前程ではないにしろ慢性的なインフレはなおも生活を楽しめてはくれない。が、食関係が安いのでガキが靴磨きをやったんとか親を食べさせていくことも可能な国なのである。

夏になると、水売りというのが出る。水槽やタルに氷の入った水をいれ街かどで一杯いくらかで売る。

前はイスタンブールの市バスは乗るとき金を払っていたが、今は切符をもっていないと乗れない (赤バスのみ。青バスは中で買える)。切符売場は大きなターミナルにしかないのだが、ちょっと人の多いバス停なら必ず切符売りが「ビレット!ビレット!ビレット!」と、声を出している。手数料は一枚につき10TL。体制が変われば、人々は流動的に新しい仕事を探しだしてなんとか食っていく。フェリーの中や路上ではおっさんがいきなりカバンを開けて、なにか手に持ち「なんやかにかんやかや!!」と、物を売りだす。日本のテキヤの口上をおもわせる。

では同じものが5年前は、どうだったかというと、

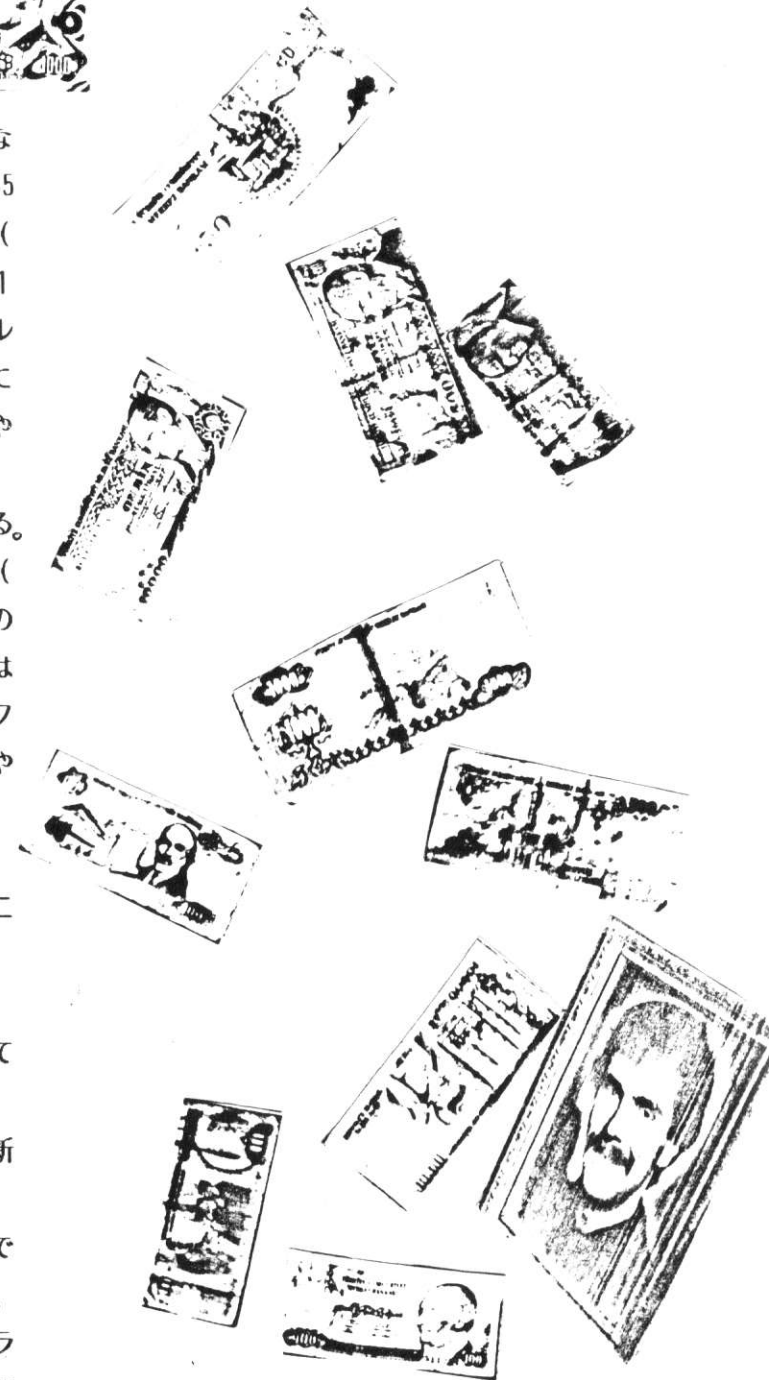
バス10TL、アイラン10TL、ビール30TL、タバコ37.5TLと、5年間でほぼ5倍になっている。またこれをUS\$対トルコリラの交換率で見ると、

1980 US\$1=70TL に対し

1985 US\$1=480TL である。最近はこれでも落ち着いてきたといえる。5年前旅行者は、まとめて換金しないということが常識だった。

前にも書いたが1980年9月クーデターが起り、軍が国の実権を握った。しかしこれはあくまでも新体制に向けての一時的なもので82年には民制に移管されている。

確かに5年前に比べると、ずいぶんと良くなっているような気がした。コーヒー豆なども品不足でトルココーヒーなど目につかなかったのだが、今回イスタンブールのガラタ橋わきのバザールでは、豆を売る店が繁盛していた。街角で「サムスン・サムスン」と、コインを入れた布袋をジャラジャラさせながらトルコタバコを売っていたが、今は皆「マルボロ」を手に入れている。少額のコインは今ほとんど使いみちがなく札が主に流通しているのだが、このスタイルだけは変わっていなかった。



## WELCOME TO RIZE

バスの乗り継ぎの関係でたまたま一泊することになった、黒海岸にある紅茶の産地。ちよっと一回りするだけでエルズルムへ向かうはずだったのだが、バスは明朝でないとなし、チケットを買ったオフィスでホテルを聞くと「おいお前、つれてってやれ」と、近くのこぎれいなホテルまで案内してくれた。

ラズ人という人種が住んでいるこの地方なのだが、人々の顔立にそう違いがあるとは思えない。しかし、『こんな田舎で』と、思うのは色彩に対する都会人、もしくは日本人の偏見なのだが、その町のはなやかさには、目を見はらされた。何がというと、女の人が皆矢がすりのベールをかぶり、しましまの布を腰に巻きつけていたものだからだ。

ソ連ウズベク地方の人々が日本の矢がすりと似た模様を持っているが、というよりこの中央アジアのほうから日本に伝わってきた模様らしいが、同じようなものをトルコで見るとは思いもよらなかった。もっとも、東はすぐソ連との国境ではあるが。

赤・黄・緑・黒でカスリに織られた布布布。私は思わず生地屋さんにとび込んで、布一枚買い込んでしまった。とはいうものの、一枚買うまでにチャイ二杯飲んで、まったく通じないのに「お前の宗教は？」などと聞かれたものだから、イスラムと仏教の相違点を、一ムスリム＝クルアーン（コーラン）、ブツチスト＝オキョー」などと訳の分らないことを言っようやく買えたのだった。

この海っぺりの小さな町の入口には、黄緑と白のストライプの布が黒海からの風をうけて翻っていた。布にはトルコ語と共に英語で『WELCOME TO RIZE』と、書かれていた。



★  
リゼの靴磨き少年。写真を送る約束でタダになった。左に修理用ミシン。

## 銀世界のバスの旅

トルコ国内を旅するならばバスに限る。鉄道はその地形からほとんど未発達なのに道路網だけはしっかりしていて、山間部でも広い道が通っている。したがって物資の輸送もトラックに負うところが大きい。長距離に行くバスはほとんど西ドイツのベンツ。近距離はアメリカのフォード。バス会社は無数にあり、それぞれが各町のバスターミナル（オートビュスガラジ）にカウンターを持ち客を待っている。ガラジではオフィスごとに行き先を大きく表示して、すぐ出るバスはおっさんが「アンカラ・アンカラ・アンカラ」などと声高に客を呼び集めている。またガラジには必ずチャイ屋やロカンタなどもありいつも人と声でにぎわっている。

バスは長距離でも休息、食事以外はぶつとうしでつっぱしる。とにかくトルコではバスに乗りさえすれば、どこにでも行ける。

リゼからいったんトラブゾンのガラジに戻り、エルズルム行きバスに乗った。助手が客の手の平にオーデコロンを振りかけてゆく。これはどこのバス会社もやっているサーピスだ。かんきつ系のさっぱりした匂いでこれを首すじ・髪に少しつけると気持ちよい。水の小ビンも必ず積んでいて、喉が渴いたら、親指を立てて口元に持っていき「Su（スウ）！」と、言えば持ってきてくれる。

バスはしだいに雪道を山間部に入っていく。

エルズルムの町じたい標高千九五十メートルの高所にあるが、そこまで二千〜三千メートル級の山間をぬって行かなければならない。黒海岸の温暖な気候とは打ってかわって、真冬のような白一色の景色が続く。

日本を離れる前、私はかなりトルコ東部のこのころの気候を調べてみたのだが、統計的な数字以外具体的なことはなんら分らなかった。山間部に雪が多いことは分ったのだが、その時期バスが運行しているのかどうかはあやふやだった。真冬、雪のため道路が封鎖されることはよくあるらしかった。

しかし、陸路を生活の大動脈としているこの国にとって、雪に対する対応策はほぼ万全であるらしい。雪山を縫うように進む道路は広く、完全に除雪されている。しかし、マイナスの気温は道路を氷らせている。油断はできない。大形バスに十五人ほど乗った我々のバスにはドライバー二人と助手が一人乗っていた。乗客はほとんど男、しかもおっさん。どこへ行くときでもこのパターンが多いのだが、一人二十歳前後とおもえる女の子が乗っているのがめずらしかった。家族づれのおばさんならともかく、若い女の子が一人で遠くへ出かけるなどということはめったにない。彼女はトラブゾンのガラジで兄弟（？）の見送りを受けたあとバスの中ではずうっとひとり刺繍をしていた。

白い山合いの絶壁にへばりつくように一軒の家が建っている。遊牧民の家なのだろうか。ドライバーは慎重に車を運転している。いつものようにオリエンタルなトルコの歌謡曲がジャンジャカジャカジャカと運転台のカセットからなっている。たまに荷を満載にして上り坂をあえいでいるトラックを超越す。ガードレールなどないスリリングなドライブだ。

バスはときどき休息の時間をとる。そこでみなチャイを飲み、シガラを吸う。このチャイはた

いてい会社もちである。バスに長いこと乗るといふのは案外疲れるものだ。私もいつも降りてチャイをすすする。ところがだ、かの彼女は全ったく降りない。

小さな山村の食堂で昼飯になった時も、皆それぞれテーブルについているのに、やはり彼女は降りない。人ごとながらつい気になって、そしていっかひの旅人として好奇心からつい目がいってしまふのだが、そんな彼女に対して他の人間は無視しているかという決してそうではない。そんな時バスの助手は彼女に必ずチャイを届け、そして何か他に必要なものはないかと聞いていく。

バスは再び走りだした。かなりカーブのきつい山道をいく。やや下り坂で緩く右にカーブしている道で前を行くトラック三台に追いついてしまった。どれも満載の荷でノロノロ運転だ。こちらのバスドライバーはホーンを鳴らし左にハンドルを切ってトラックを超越しはじめた。ノロノロトラックを二台抜いて三台目を抜こうとしたそのときだ。カーブのせいで見えないうえに追抜きのうなのだろうが、追抜きをかけているためはいっている対向車線にいきなり前からトラックが現われた。向こうが気がつくかどうか止まらないうえ、道をゆずってくればこっちはバスはなんなく三台目のトラックも抜いて問題なく行けるはずだった。私も日本では免許を持ってずいぶん車には乗っているが、あの場合いくらかこっちは対向車線に入っているとはいへ、山道のしかも追越しをかけている最中である。当然向こうが止まるだろうと思っていた。ところがである。向こうのトラックはそのまま突っ込んでくるように前進し、我々のバスのほとんど目の前まできてようやく止まった。といっても、向こうは上り坂のこれまた満載なのだからスピードというほどのものはでない。これは完全に故意である。

バスが抜けるためには目いっぱいハンドルを右に切って、追越しをかけていたトラックの二台目と三台目の間に入らなくてはならない。わがバスドライバーのこがらなおっちゃんは右にハンドルを切り、トラックの窓のところまでバスを進ませ、トラックドライバーに向かって猛然と非難の言葉を浴びせた。——言葉の応酬になった。——バスのおっちゃんは乗客のことを考えたかどうかしれないが、つきあってられんと、バスを動かそうとした。——ところがそこに太めのトラックドライバーが罵声の追討ちをかけた。——もう我慢なんねえ。おれはやるぜとばかり、バスドライバーのおっちゃんはベントツのバスをしっかりとハンドブレーキで止め、上着を脱ぎすておもてにとびだした。——はつきりいって、けっそうを変えている。——おっちゃん、トラックドライバーを窓ごしになぐりにかかる。——助手も乗客も後を追ってバラバラととびだし、バスドライバーのおっちゃんを止めには入るが、皆やったろうか、このやろうという気持ちだ。

バスの中には私と、男一人と彼女が残った。私もとびだしていきかたつたのだが、へたに変な東洋人がまじって話がめんどうになってはまずい。はやる気持ちを押えた。彼女は「アイー・アイー！」と叫び、いまにも泣きそうだ。

ようやく助手たちはバスドライバーをなだめて、バスにつれもどした。さすがに運転は交代だ。もうひとりが運転台に座る。おっちゃんは今だ興奮さめやらぬ、奮然とした面持ちでバスの一番後ろの席にいらしてしまつた。

バスは走りだしたが、さっきのけんかが尾をひきバスの中は、話声もあまりしない、めいっつた雰囲気につつまれてしまつた。

トルコ人というのは結構話好きで、バスのなかでもしーんとしてしまうことはまずない。たえず、にぎやかなトルコ音楽はかかっているし、あちこちでナッツをかじりながら世間話をしていたりするものだ。ところが、今は違う。

私はなんとかならんかなと、思った。

私はバッグの中に一本のカセットテープを持ち歩いてきた。前にトルコに来たときバスの中ではいつもカセットをかけていたので、こいつをかけてもらおうと思ってわざわざ日本からかっぴできたものだ。五輪真弓の『恋人よ』だった。五輪真弓の曲にのってトルコの荒涼とした道をぶつとばす。そんなイメージが気に入っていたのだが……。

私はしばし迷ったあと、テープを取り出して助手に渡した。

「これかけてよ」

バスの中に五輪真弓の音が流れだした。が、いまいちだ。いつもトルコ歌謡曲をかけているようにポリリュームを上げてくれない。私の頭の中には、五輪真弓のわりとスケールの大きな歌い方とトルコの大地がオーバーラップするはずだったのだが、どうも浮いている感じがしないでもない。私は予想される乗客の反応を待ったのだが、その時は不思議なくらいなんの反応もなかった。私は少し気が沈んでしまった。

その後、カセットは旅の終わりにイスタンブールで知あったメフメットの手に渡るまで、私のバッグの中から出ることはなかった。

バスの窓からは、白樺が並ぶ雪の原野を、いのしらしい動物が一頭トコトコと歩いているのが見えた。雪深い山中に現われた駐屯地の前で乗客の一人だった将校が降りていった。エルズルムに着くのは夜になりそうだ。





## イサクパシヤ・サライの犬

三月十二日、エルズルムの町を出たバスは雪山を越えドウバヤズィットに向かっている。日没前、左前方に山が見え始めた。アララット。がっしりとした山肌、朱が落ちていく。

今回の旅でこのドウバヤズィットが一つの起点になっていた。一九八〇年、計画段階ではトルコからイラン・アフガニスタンを抜け、パキスタンに入るという予定がソ連による突如としたアフガン侵攻。そしてイラン革命で変更を余儀なくされ、私達はジョルダンから一日アテネに戻りパキスタンのカラチまで飛んでしまった。あの年、陸路イランに入国できれば、ドウバヤズィットに当然来ているはずだった。

今回私はイラン入りの気はまったくなかったが、とりあえずトルコの東端ドウバヤズィットまで行くことにした。

ドウバヤズィットは辺境の町ではあるが、イラン入りの中継地として繁盛し、活気のある町だ。ここを通過している国道はE23と呼ばれ、かつてヒッピー黄金時代には、ヨーロッパから多くの人間がここを通過し、陸路インドへと向かった。

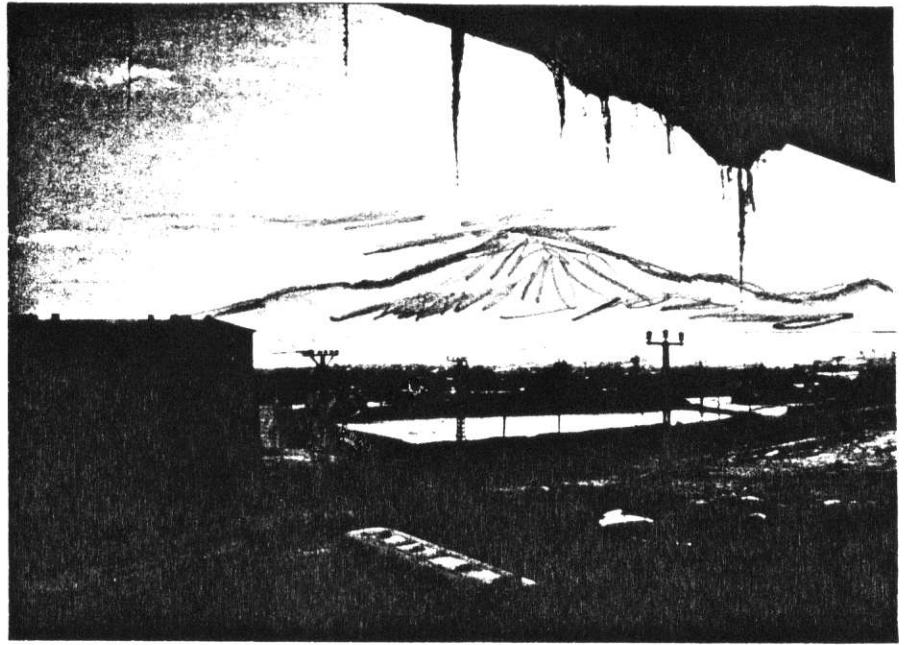
エルズルムあたりからは、商店のウインドウにペルシア文字が目にとまるようになった。そして、「アッサラム・アレイクム」と、アラビックの挨拶がしばしば耳に入る。エルズルムでは私も路地裏で「アッサラム」と、声をかけられた。私は「ワ・アレイクム・サラーム」と、言葉返す。六年前の旅の産物が役に立つ。道に停まったバスの行先表示には、《テヘラン》の文字が読める。

ドウバヤズィットの町自体はそれほど大きくはない。二・三百軒商店街といえるメインロードがあり、端に小さなバスオフィス、反対方向に向えば町の大きさにしては立派なジャーミー（モスク）。民家その他は、もっと回りに広がっているが、そう大きくはない。また、さっきのバスオフィスの方向にもっと行くと、陸軍の基地がある。トルコはNATOの一翼を荷なっている。

暗くなってからドウバヤズィットに着いた私は、同乗の連中に聞いて、モテル・ケントに向かった。彼等若者三人も行くという。このモテル・ケントというのは、旅行記などにしばしば出てくるホテルで、ここからのアララットの眺めはすばらしいという。私は最初からここに泊まるつもりでいた。

道々いくつか他の宿を目にした。それらは、いわゆるドミトリー式のベッドを並べただけの安宿で、どこも混んでいるようだった。モテル・ケントは、町のメインストリートから別れた、国道沿いにあったが、この町ではここが一番いいところらしい。いっしょに来た三人はフロントの人間と話をしていたが「おれたちは、他へ行くよ。じゃな!」と、いつて出て行ってしまった。彼らには高すぎたのだろう。

私は、ツインの部屋しか空いてないと言われたがOKした。鍵をもらって二階に上がり、部屋に入ったが、案外にポロイ。トルコで「モテル」というのは、ホテルよりもランク下のものなのだが、なるほどと思う。しかし、トイレ・シャワーなしの、壁にしみのある部屋にしては、高い。だが、その部屋の二重窓の向かいにはアララットが、そびえている。私はとりあえず、満足



だった。アララットには、私はそう興味はない。ノアの箱舟が漂着したという伝説がまつわるこの五一六五の山、それが目の前にあるだけでよかった。

この町で他に見るようなものはほとんどない。ただ、町から5kmほど離れた小高い所にイサクパシャ・サライという、クルド人の建てた宮殿跡がある。これも小説などに出てきたりして、それなりに興味を誘う場所だった。翌日出かけることにした。

朝、ホテルの人間に道を確認した。ホテルの人間といっても制服着てるわけじゃない、きのうと違う人間でよく分らないのだが、フロントにいたからおそらくそうなのだろう。彼はついでにシングルの部屋が空いたから、そっちに移れよと、言ってくれた。

外の空気は冷たい。軍手をして、毛系の帽子をかぶって出た。

町を抜け、少し行くと陸軍の基地がある。兵舎・兵隊・戦車、左前方にアララットが雲をかぶって見える。

歩くうちに、暑くなってきた。帽子を脱ぐ。途中から細い登山道のようになり、少しづつレベルが高くなる。道は雪道だ。私はサングラスを宿に忘れてきたことを少し後悔した。

上から、町に買い出しに行く遊牧民だろうか？降りてくる。彼らを二・三人やりすごした後親子らしい二人づれと行きあった。彼らは私の前をふさぐようにして、タバコあるかと、いうしぐさをする。ちょっとやばい感じがした。私はトルコ入国以来愛用している「マルテペ」を二本抜いてわたそうとした。ところが、受取らない。箱ごとよこせと、いう。しかたなく私は、抜いた二本をポケットにしまい、まだ大分残っている箱をわたした。するとこんどは、火はあるかと、いう。トラブルは面倒だ。私は百円ライターもわたした。彼らは、これで一応満足したようだった。

『イサクパシャの中へ入るには、入口わきの民家に声をかければ鍵を開けてくれる。』と、ガイドブックに書いてあったのだが、私は若干考えねばならなかった。当然、幾らかは出すとしても必要以上渡すはめにはなりたくない。私は小銭をポケットに分け、残りをしまった。用意周到。道はだんだん急になり、アララットは近くの小高い山に隠れた。

写真で見ていたイサクパシャ・サライが、前方高くに望める。雪をふみしめながら歩いていると、もう少しという所で、道が二又に分れている。イサクパシャは、ちょうどその真中あたりに見える。

どちらの道を行っても、同じ所に出られそうだった。

道路表示板が、雪に半分埋まりながら、右へ矢印の一方通行マークを示している。「車が右なら、そっちの道の方が広いのだろう」と、私は右に回った。

道はさらに急になる。民家が目に入った。羊が二・三匹トコトコと、逃げていく。その時！犬が猛然とほえながら、迫ってきた。牧羊犬だ!!。

民家に踏み込んでしまったか？ 私はあとじさった。と、右手からもう一頭、同じような大形のシェパードほどもあるうかという犬が飛び出して来た。

頭の中が急回転する。／とにかく背は見せられない。後ろを見せたら、奴らは確実に飛びついてくる。／幸い、ほえたてる犬を真正面からにらみつけると、そいつはパツと五・六歩逃げる。すぐまた向かってくるのだが、こっちが後ろを見せない限り、奴らも怖がっているから大丈夫だという気がした。

私は左右の二頭を交互ににらみつけながら、あとじさりで坂を下だっていた。

ただ、この状態がお互いどこまでもつかだ。もし、奴らが一線を突破して、飛びかかってきたら……？

私は、シオルダーバッグの中にひそませていたナイフをさっきから考えていた。

『やらにゃならんかな!!』 本気でそう思った。

私は旅行中といえども、なぜかこの一日だけナイフをシオルダーバッグの中に入れて、持ち歩いていた。こんどの旅に出る前、ちょっとと丈夫なつくりの折りたたみ式ナイフをアメ横で買ったのだが、そうたいしたしろものではない。普段は、果物を切ったり、パンを切ったりしか使うこともないので、宿に置いたまま持ち歩くことはない。むしろ、武器になりそうなものは、持ち歩かないことをして、旅の基本としている。日常、武器とは縁のない生活をしている日本人が使い慣れない物を持つのは、かえって危ない。

しかし、その日なぜナイフを持ち歩く気になったのかは今もって解らない。ただすぐ隣は、イラクと交戦中のイランであり、そんな不穏な空気、緊張感をなんとなく感じていたのかもしれない。だとしたら、これはかえってまずいことだったのだが、幸いにも使わずにはすんだ。(これは後で知ったことなのだが、ちょうどこのころ、イラク軍はイランの首都テヘランを爆撃していた。)

とにかくこのまま、じりじりと下がって行って、犬があきらめるのを待つしかない。

案の定、奴らにはテリトリーがあった。

私が10分位、後退したところからはほえるだけで、追ってはこなかった。私はなおも用心して、さっきの二又の所まで背中を見せずに戻った。

まだ一匹、こちらを見る。

私は犬にアカンベをした。おかげで汗びっしょりだ。



気を取直して、こんどは左の道を行く。こっちのほうが広い。イサクパシヤはもう目の前にせまっている。

少し行くと、左手の丘から少年がへこちへこいゝと手まねきしている。民家があって、羊がいるのが見える。ともかく、どこかで鍵を開けてもらわなくては：私はそっちに行くことにした。道はずれ、がれ場になった斜面を降りてまた上る。民家の土塀の上に犬が一頭ねむっているのが見えた。しかし、人もいることだし、この犬がまたものすごく寝むたそうな目で日向ぼっこしているものだから、私は安心しきっていた。シェパードほどと、大きさを書いたが、顔つきは皆まるっこくって、そう狂暴な感じはしない。

が、突然、ガバと起き上がったかと思うと、そいつは一直線に突進してくるではないか。

『まただ!?!』

と、思うまもなく右のほうからも二頭、ほぼ同時に襲いかかってきた。一難去ってまた一難。

しかし、三頭いっぺんではどうしようもない。私はあつという間に、ズボンの左ポケットのあたりを、そのうちの二頭にかまれてしまった。なすすべもないというのは、こういう時だ。少年がすかさず石を投げ、どなって追いはらってくれたからよかつたようなものの、ひとりだったらどうなっていたか。だが、さっきの緊張からとかれた後で気が抜けていたにせよ、人がそばにいれば、むやみに近付いたりはしない。

どのくらいかまれたのか分らないが、手でさわると痛む。

私は、「お前んちの犬にかまれてしまった。なんとかしてくれ」と、おおげさにふるまって見せたが、それを見ていたおふくろさんらしき女はニコニコと笑っている。気がつくと、じいさんらしき男もいる。

少年は「タバコ持っているか?」と言う。

私はポケットから取りだすが、二本しかない。一本やって、私もマッチで火をつける。

「金あるか?」と聞く。

私はポケットにわけておいた50TLを出す。

「ダメだ。」

もう50出す。

「ダメ」

ズボンのポケットから10ヶ・5ニケもやる。分けておいた小銭はもうほとんどない。私は「イサクパシヤを見たいんだが、どうすればいい?」と身ぶり手ぶりで聞くが、奴は「おれが一緒に行つてやる。けどもつと何かよこせ」と、ニヤツと笑った。おれが一緒じゃないと犬が襲うぜとゼスチャーをする。

陽にやけた褐色の顔にアカだろうか、かさかさに乾いた土色の皮がまだらにはりついている。そのくせ、目と歯だけがやけに明るい。私はこいつの顔を写真に撮りたいと思った。しかし、今カメラを取りだすわけにはいかない。私は心の中でシャッターを切った。

向こうでじいさんが、犬がいるから危ない。「ギユレ ギユレ」と手で追っばらうしぐさをする。《ギユレ ギユレ》とはトルコ語で見送る側の人がいう「さようなら」だ。少年にも早く追いつき帰せといったようなことをいっているようだ。

少年に私は奇りそうようにして歩き、さっきの道まで戻った。歩きながら奴は「どうする？」と聞いてくる。イサクパシャがだして犬と物との交換なのだ。一瞬迷ったが、私は決心した。イサクパシャはあきらめだ。もうほんの少して門の前まで行けそうな距離に見えるが、こちらほうすっきり戦意は喪失している。さっきかまれた傷も心配だ。

「アツラハウスマルドウク」（帰る側の言うさようなら） 私は下だっていた。

足速に少し下だってからカメラを取りだし、イサクパシャを撮った。ついでにズボンを下げて傷を見る。ズボンは破かれていないのに犬歯が入っている。血がにじみ、周囲があざのように色が変わっている。

《犬にかまれた時の注意——よく流水で洗うこと。》

私は雪を手にとって傷口を洗った。心配なのは狂犬病だ。

ところで、「海外生活の手引き」という、外務省かどこだかが出している冊子がある。地域別に何冊かにわかれているが、巻末に海外でかかりそうな病気の一覧とその症状、治療などが簡単にまとめられている。現在出ている版はだいぶ改訂されているらしいので分らないが、私が前の旅の準備をしていたとき読んだ「狂犬病」の項はすごい。

かまれたらとにかく水でよく洗え／もし狂犬病もちの犬にあたって、症状が出たら5〜10日で死ぬ／狂犬かどうか調べるために、その犬を殺して首を氷づけにして病院へ持って行け／と書いてあった。いったいどういふつもりなのだろうか。これを書いた医師はライオンのような男なのだろうか？

今、日本にいて犬にかまれることなどめつたにない。だいぶ以前アルバイトをしていた仕事で人の家の庭に入っていく、突然の進入者におびえきった雑種の飼犬にかまれたことがあった。濡縁の下に隠れていたそいつに、こっちはまったく気がつかなかったのだが、その時私は『犬というのは本当に噛むのだ』と、ひどく驚いたものだった。めつたにないだけに、そしてもしかかったらアウトだと思ふと心配するなというほうが無理だ。

『もし発病して、血清がなかったら…、こんな田舎じゃあるわけがない。いざとなったら、あの陸軍基地に頼み込めばへりでアンカラあたりまで飛ぶこともできるだろうか…』

モテル・ケントに急ぎ足で戻った私はすぐ水しかでないシャワーであらためて傷口を洗った。昨晚寝た部屋にはバスルームが付いていなかったが、シングルのかんどの部屋にはシャワーが付いている。アララットの雪どけ水じゃないかと思うほど水は冷たく、鳥はだか立ったがていねいに洗って、赤チンをぬいたら急に疲れが襲ってきた。私はしばらくベッドで眠った。

夕方、目をさまして町にでてみると、アララットは半分雲をかぶって夕日を受けていた。あれから、一年以上たっても傷跡は消えない。





## 城壁の街のガイド

ディヤルバクル。トルコ南東部にあるこの都市を訪れる外人の観光客はそう多くはない。トルコ政府が最も観光資源として力を入れている、中部アナトリアのカツパドキア地方まで足を向ける人間は多いにしろ、それ以东を指す者は少ない。それはトルコの観光が、イスタンブールを中心として、またヨーロッパ及びヨーロッパから入るアメリカ人などを対象として考えられてきたからに他ならないが、トルコの良さ面白さは、むしろ東に行つてこそ見い出される。

旧市街の回りは一周55kmあるという、ローマ時代に築かれた城壁に囲まれ、市の東側にはチグリス川が流れる。城壁は良く残っていて、各方面に塔あるいは門があり、場所によっては登ることもできる。南東にあるマラディン門近くの塔に登ると、旧市街が一望に見わたせ、逆に向きを変えれば、黄金色にかすむチグリスが望める。

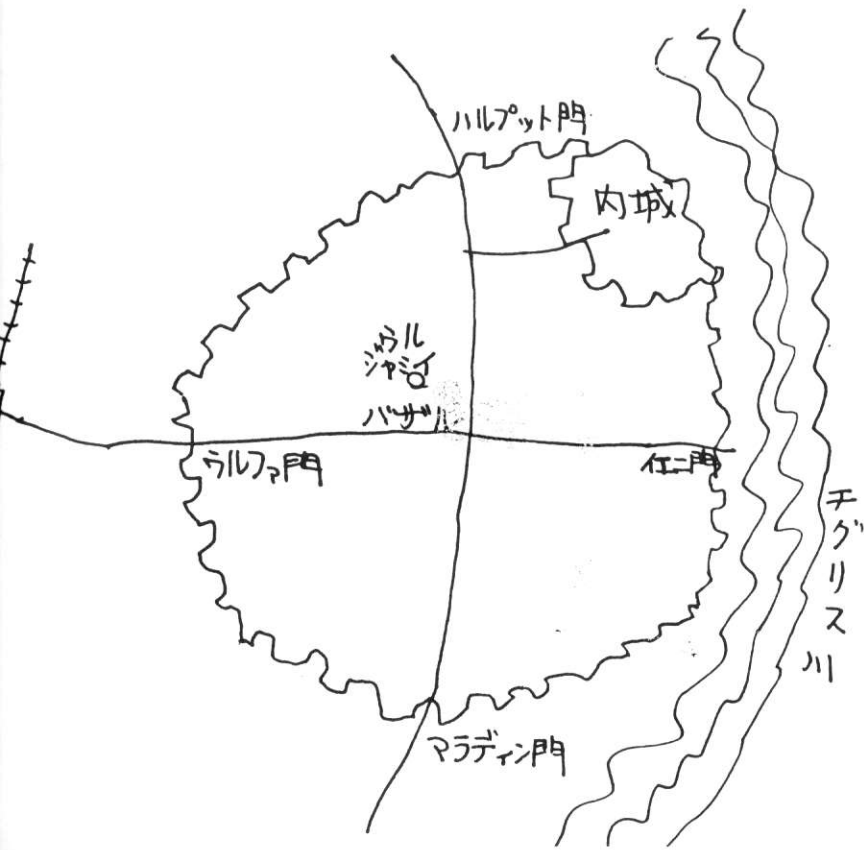
城内の中心にウルジャーミイというモスクがある。ここはトルコ中どこでも見るジャーミイとはちよつと形が違う。トルコのジャーミイは普通イスタンブールにあるような、丸屋根のこんもりした形なのだが、ここにあるのはシリアのダマスカスにあるオマヤッドモスクにそっくりだということだった。行ってみると確かにそうだ。中庭式の広い長方形の空間、回廊式のモスク。ダマスカスのオマヤッドモスクは中庭の床一面大理石で、内壁はビザンティン時代のモザイクがすごかったが、ここはそれをもーっと古々しく、じみにしたような感じがする。

オマヤッドは外につながるバザール（あっちではスークだな）にローマ時代のコリント式の石柱がそのまま使われていたが、ここでは柱頭に飾りのついた石柱はジャーミイ内の回廊の柱として残っていた。ローマの遺産というのもすごいものだと思う。

オマヤッドモスクは中庭も建物の中、つまり神聖な場所という扱いで、入口で靴を脱がなければ入ることはできなかった。夏の真っ盛り、白い大理石が太陽の光を反射し輝いていた。そして人々はその強烈な光をさけて回廊の日陰で身を休めていた。

形は似通っていてもディヤルバクルのウルジャーミイは随分と印象が違った。その中庭は庭というよりもむしろ広場といった雰囲気に近い。ここで靴を脱ぐ必要はない。石畳の床は壁や柱と同じ、くすんだ色になっている。季節の違いはあるにせよ、やけに暗い感じがした。

コートを着た男達が、壁に寄り掛かって話している。



ジャミイのすぐわきにチャイ屋がある。外にはトルコ中のチャイ屋のどこでもがそうであるように、小さな椅子とテーブルがちらばっている。そしてこれまたトルコのチャイ屋のどこでも見る光景だが黒っぽい男共でうまっている。いったいこの人達は仕事をしているのだろうか？と、普段は勤勉な日本人はつい思ってしまうのだが。

このあたりからマラディン方面へ向かって大きなバザールがある。中には日用雑貨品から服などと共に、馬具関係を扱う店も並び、カラフルで民族色豊かな色彩の馬の飾りひもなどは見ているだけでも楽しい。

表のこまもの屋では糸や柳などと共に「アラ-の目」だとか、「アラ-の手」だとか、「豆クルア-ン」などを売っている。(イスラムは基本的に偶像否定だが、もともと土俗的なものかもしれない)

通りを渡って、ふと向かいを見るとバザールの上はこれまたチャイ屋になっている。どこから上がるのかよくわからないが、ここも黒い男共でうまっている。

油:ブルーのアイスクリーム



「アラ-の目？」  
 ← 白っぽい五つの目、  
 香い、みたい、  
 青い目



「アラ-の手？」  
 ← ライトブルー



金色の金具の表紙



中を出すと  
 コーランが  
 豆本なみの  
 細かな字  
 で印刷し  
 ている

「豆クルア-ン」

ディヤルバクル二日目、マラディン門に向かって歩いてみると、途中で若者二人に英語で声をかけられた。話をしながら三人で塔の上に登り、城壁の上を歩く。高さは七・八メートルだろうか。遠目にはよく残っているように見えるが、実際歩いてみるとくずれている所も多く、歩き難い。見渡すと城壁の内側ばかりではなく、城壁外にも民家がずうっと並んでいる。このあたりだと民家といっても都市型の建造物ではなく、もっとローカルな土で固めたような平屋もしくは二階屋が並ぶ。しかし、高みから見ると、土色の中に色とりどりの洗濯物が目に入り、意外と華やかな街に見える。

兄弟らしい二人の年長の方が、年は私と同じくらいだが、よく英語を話す。彼は歩きながら遠くに、あるいは近くにあるものをいちいち指さしてあれはなに、これはなにと説明する。ところで仕事はなにをやっているの？と聞いてみたら、「ガイド」と答える。私はガイドは必要としない。いつもそんな旅をしているのだから。

「ガイドはいらないよ」と言っても、「いいよ、いいよ友達だから」などと言ってついてきていっしょに歩いていたので、途中で「僕は君の手助けをするから、君も僕を助けてくれよ」と意味ありげなことを言う。「そりゃいったい、どういうこと？やっぱり金？いくら？」と聞くと「3000」と言う。「とんでもない。払わないぜ」とつっぱねると彼は「いや、冗談冗談」と逃げる。

そして相変わらず、「KIYOTSUGU、あの女を見るよ！美人だぜ」などとガイドを続けていた。

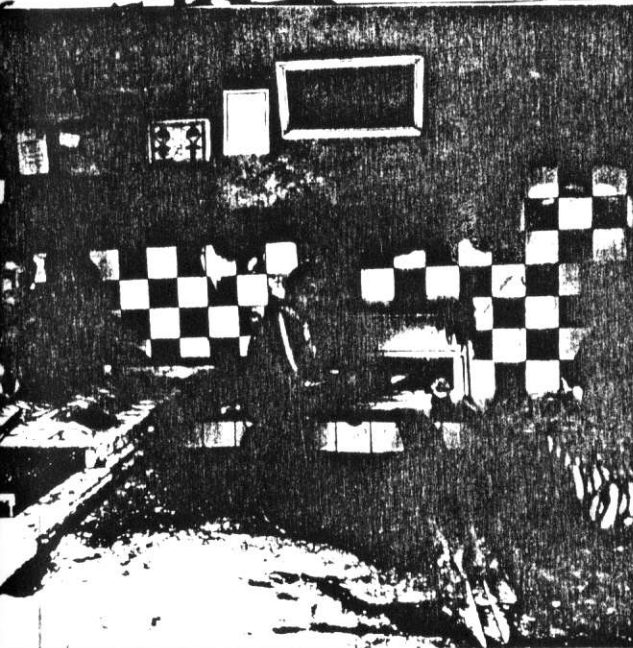


ウルファア門あたりで城壁の上から降り、市内に戻る。ガイドは断ったにせよ、向こうが「あっちに行こう」と、先に道をつくるので自然ついてゆく形になる。「迷路だーカスバというのには行ったことはないが、そんな言葉を思ひださせる。民家に挟まれた狭い道がくねくねと続く。別に怖そうな様子はまったくくないのだが、知らない土地でどこに抜けるのか分らないような小道に一人ではなかなか入ってはいけない。

そんな道を三人で歩いていたら、なんとシミット工場に出会った。シミットのことは前にも書いたが、直径15cm位のゴマのついた輪っかパンで、トルコ中どこでも売っているスナックのよなものだ。しかしあれだけ大量に売られているシミットを作っている所を目にしたことはなかった。パン屋ならばどこでも売っているところ即ち作っているところなので、パン屋に行けばカマドの火が見られた。だいたいシミットというのは、同類であってもパンとは一線があるらしい。パン屋にシミットが置いてあることは絶対ないし、もっぱら屋台の手押し車の中とか、子供が頭の上に乗せている大きな金属のお盆の上などにある。子供も大人も皆こうして売り歩いている。どこかルートが違うらしい。ちなみに値段はというと、20〜25TL（10円か15円）。ほとんど同じものがギリシアにもあって、音楽にしろ食べ物にしろ今は仲が悪いとはいっても隣の国、共通項が多いものだ。それはさておき、そのシミット工場だ。

中では子供大人とりませ十人程がぎじをねって、丸めて、伸ばして、輪っかにして、おっさんが正面にあるカマドに入れてとやっている。私はとにかく何かものをつくっている所というのが好きで、こういうのに出くわすと喜んでしまう。

カマドの上にはコーランの文字とアタチュルクが額の中で輝いている。私が興味深々のぞいていると、カメラに気づいて撮ってくれと言う。中はかなり薄暗かった。私は「ちょっと暗くて無理だぜ」と、いうことを通訳して伝えてもらおうと、なんとおっさんは、上からぶら下がっていた裸電球一つ点けて、さあどうぞこれならいいだろうと手を広げる。こうなったら撮らない訳にはいかない。私はしっかりと脇をしめて二枚シャッターを切った。皆、気の良さそうな職人だ。いつもどうり写真を送る為にアドレスを書いてもらったら、手帳と一緒に焼きたての湯気のたったシミットが一つついてきた。こんなシミットめったに食えるものではない。「ガイド」の彼は私の嬉しそうな顔を不思議そうに見ていた。



年下の方が学校へ行くからと行ってしまったので、それから二人で歩いた。途中ちょっと休もうと迷路の中の小さなチャイ屋に寄った。

彼は英語よりも独語か仏語の方が得意らしい。私が英語しかわからないというと、残念そうな顔をした。英語を話すとき彼は口をゆがませて、さもしゃべりにくそうに話す。その感じがなんとも憎めない。

彼は話す。

「おれはまだ結婚してないんだ」

「なんで」

「金がないからさ」

「今は定職がないから、時々団体のツーリストのカイドなんかやっているだけだね」

「アンカラには家族がいるんだけど、なかなか会いにもいけないよ」

「ところでどっか行きたいとこない。欲しいものは」

「女いらない？」

情にほだされた訳でもなく、話半分にししか聞いてもいなかったが、さっきのシミット工場めぐり会えたのもこいつのおかげだと、私はちょっと払ってやる気になってきた。

このあとバザールをいっしょにまわることにして1000TL。後にも先にもガイドを雇ったことなどこのときだけである。



## ハジラールの夜

カイセリは、アンカラの南東三百km程にある地方都市である。このあたりは中部アナトリアと呼ばれている。

街の南方にはエルジェスという名の山があるが、『日本人はこれを「トルコ富士」と呼んで絶賛している』らしい。街はずれにある考古学博物館まで行くと、前方が開けて山がよく見えるのだが、ふもとまで雪をかぶり、陽がさすと二等辺三角形に白く輝く山はなんとも美しい。しかし富士に似た山をよそでみつけると、すぐ「何々富士」とつけたがる日本人の癖は改めた方がよい。これは最悪の表現というものだ。

カイセリには観光客も多い。私のいた三月はまだシーズン前で、ほとんど目につかなかったが、ここから百km程行くと有名なカッパドキア（ギョレメ渓谷）があり、日帰りも可能な為、団体ツアーなどは設備の良いこの街を起点にするらしい。

そしてカイセリはカーペットの集積地としても知られる。トルコでは昔からカーペットの生産が盛んである。一般にアナトリアカーペットと呼ばれているが、ペルシア絨織とは、その織り方（糸の結び方）が違い独特のものであるらしい。文様はいわゆるアラバスクがほとんどで、他にミヒラブ（モスクの中でムスリムが祈る方向）メツカーにつくられる窪み型のももある。またアラバスクといっても、その内容は様々で、抽象的な大きな柄から細かい柄、草木鳥獣を織り込んだものまで様々だが、ペルシア絨織に比べると若干粗い感じがする。が、それは好みの問題で質の問題ではない。トルコのカーペットはアナトリアの乾いた台地で作られるにふさわしい色合いと、味をもっている。

さて、そのカイセリに着いてまずいつもの宿決めなのだが、ガイドブックにあるホテルを探しても見つからない。その場所に同名の菓子屋はあるのだが、ホテルはない。外で立ち話をしているおっさんに聞いてみてもないと言う。要領を得ないが、ないものはない。近くにホテルはないかと聞いたら、あそこにホテルがある。あそこがいいと、言う。そこはカイセリーの「ホテルツラン」なのだが、他に目につかないし『荷物を持って探す気もせん』といったものの考えに走り、ツランに行ってしまった。カイセリーとは言っても、そうたいした宿ではない。

荷物を置いてさっそく街の探索と、明日移る宿探しに出かけようとしたら、入口でおっさんに声をかけられた。

「カーペット見にこんか。下にいっぱいあるんだぜ」と言う。

そういえばこのホテルのわきには、絨織屋のショウインドウが見えた。ヒゲのでっぷりとしたおっさんはシェフだとか何とか言っていたが、ホテルのオーナーが絨織屋もやっているのだろうか。私もともとカーペットに興味があったし、カイセリで買えばイスタンブールの1—3位で買えるという話もあり、ごく小さいのを一枚買おうとは思っていたので、とりあえず値段でも聞いてみるかと、ついていくことにした。

地下は倉庫のような大きな部屋になっていて、日本の家具屋といった感じがするが、置いてあるものというところのカーペットばかりが積み重ねられ、あるいは壁にかけられていた。

「おー、さすがにあるなあ」などと感心して見ていると、おっさんはもってこさせたチャイを飲みながら、

「ここはカイセリ中で一番大きな店だぜよ。産地と直結しているから、物はいいし、安いぜ。」

「街の小っちゃな所で買おうとボラれるぜ。」

「どうだい　こんなのは」といって、積んであった絨緞の一山から一枚一枚みせながら、広い床にばらまき始めた。

私もチャイを飲みながら、

「ちよっと大きいなあ」

「うーん、柄がどうもなあ」と見ていたが、ためしに横に積んであった玄関マット程のを指さして値段を聞いてみることにした。

「これでいくらぐらいすんの」

「二千八百だが、あんたは今日始めての客だから二千五百にしとくぜ。」

「いい色だぜ、これは」と言っつて、こっちの山をくずしだした。

おっと危ない。私は興味なさそうに壁のほうを見にいった。その後をおっさんがついてきて、いろいろ説明をしてくれるのだが、その中にすごいのがあった。売約済みで発送の為に置いてあった三畳ほどの絹のカーペットなのだがこれはすごい。模様が細かく、表面はビロードのように光っている。札に値段と共に送り先が書かれていたが、それはなんと日本だった。金額千六百US\$。トルコリラにすると八十万トルコリラである。日本円で四十万という代物である。こっちは二万・三万TLの小さいものをさらになんとか値切ろうとしているのだ。

とにかく、ここでは買う気はなかったので、何とかかんとか見せられるものにケチをつけ、「街を見学してくるよ。あとでまた寄るから」といって、とりあえず外へ出た。

観光客も多く泊まるはず、そしてカーペット買付けの業者なども多く集まるはずなのに、なぜかホテルがあまり目につかない。ガイドブックにある他のホテルも見つからない。トルコでは宿と飯には絶対こまることはないといってもいいほどののに、たまにこういう街もある。ともかく一軒、目ぼしをつけておく。

街をぶらついていて、若者二人に英語で声をかけられた。

「やあ、カイセリは何日目だい？」

「キャラバン・サライがあるけど、見た？」

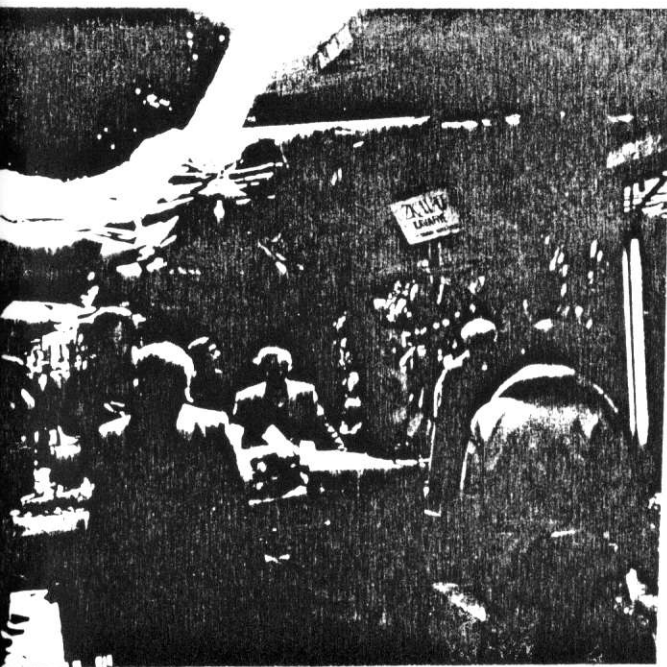
キャラバン・サライというのは興味がある。この古い街には城壁跡とともに、バザール附近には土色の建造物がそのまま残っていて今も使われている。勿論、今はラクダを繋いでいるわけではないのだが。

ここがキャラバン・サライの跡だといわれた所はバザールの一角、方型の回廊状の建物で、まん中は、広い石畳の空間になっている。

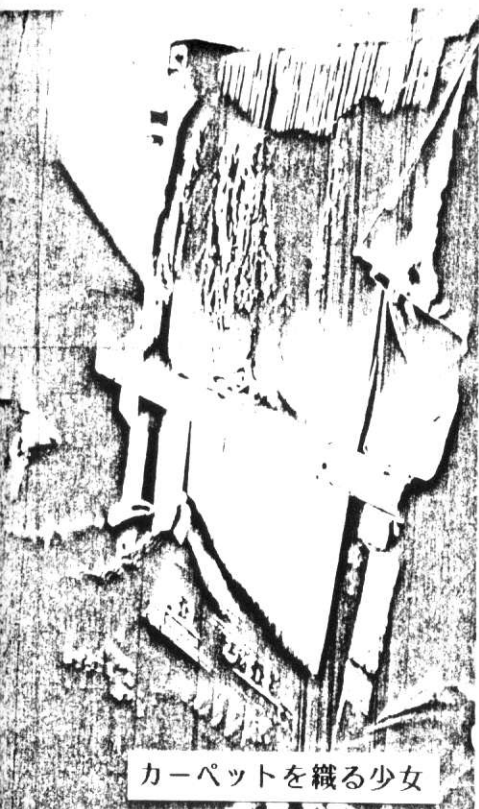
角の店から人が出てきて呼ぶ。「おれんとこの店、見てけよ。」

先の若者とこの人間は知り合いのようだ。

どこでもすぐチャイは出てくる。



カイセリのバザル



カーペットを織る少女

店といっても小さな事務所といった感じで、四畳半位しかない。その狭いオフィスのそここかにカーペットが積まれている。ベンチの一方に座ると、さっそく向こうは商談に入ってくる。「これはすこいだろう」と、いきなり絹だ。

玄関マットサイズの小さいやつをくると回しながら、床につぎつぎと放り投げてゆく。「おあーっ。きれいなもんじゃのう」と、私は感心した。

くると回しながら無造作に放り投げるのには、それなりの訳がある。その落ちてゆく途中、波うつカーペットが、キラツ、キラツと光るのだ。彼はその効果を十分に知っている。

しかし、こんなもんいくら見せられても、買えるわけがない。早々に逃げだした。まだほとんど観光もしてないうちに、疲れる街だ。

昼少し前、街のツーリストインフォメーションへ行ってみた。街の地図でももらって、ついでにカーペットの生産地で、作っている所も見られるらしい「ハジラール」という名の村への行き方を教わるつもりでいた。

インフォメーションは大通りを渡って、ジャーミー（モスク）の横手であった。カウンターには「英語」「仏語」「独語」と書かれた札があり、三人の職員が常時座っていそうなのだが、今は誰もいない。そこへちやうど出てきた人に聞いてみた。

「あー、英語を話す人ならいるはずだが」と、彼は奥に呼びにいらしてくれした。

出てきた役人は、ヒゲのりっぱな、ちやうど険しい顔をしたおっさんであった。

「ハジラールへ行きたいのですが、行きかたを教えてください。」

「どうして、ハジラールへ行きたいのかね。君は」

「カーペットを作っているところを見たいのですが」

「ふむ。カーペットね」

「この近くでもやっている所がある。わしもちやうど昼休みになるから、いっしょに行こうではないか。ちやうど待っていてくれ。」と言う。

外で待っていると、まもなくおっさんはコートを着て現われた。

二人で、考古学博物館方面に向かって歩き出す。このおっさんはトルコ人にしてはなぜか重々しくてとっつきにくい。

「どこに泊まっているんだ」

「ツラン」

「あそこの地下室を見たか？」

「ああ、さっきね」

「あそこは友達の所だが、いいものがカイセリ一安く買える。ハジラールと同じ値段でね」

話しながら十分程歩くと、右手にセルジुक時代の墓石のある所まで来た。おっさんはその動きをぬけ、路地をまがりどある民家に入った。声をかけた。出てきたのはトルコのおばさん。頭にはスカーフをまいている。話がついたらしく、私もいれてもらう。

中に入ると、土間のわきに板の間があり、そこに小さな織り機が立てかけられていた。奥から十二、三歳の女の子が出てきて、私には目もくれずに実演を始めた。

役人のおっさんが説明してくれる。

「ひとつ織り上がったあとなので、これからまた続けて次のを織るんだが、今のところはまだそのふちの所だ」

「ああやって一本一本、結んでは切っていく」

「これぐらいのを作るのに、どのくらいかかるんですか？」と私。

「そうさね、ひと月かな」今やっているのは、ちょうど玄関マットサイズのものだった。

「写真をとってもかまわんよ」と、おっさん。

カメラを出して、二枚、少女を撮る。が、この子妙に愛想がなくてつまらない。ま、意識してやっているんだらうが。

おっさん、ささやく。

「彼女たちの生活はとても貧しいんだ」叩叩に力がこもる。おっさんの表情には、『ただ見はさせんぞ』という気持ちが見取れる。わざわざ言われなくとも、礼はするつもりだった。私はポケットから五百TL札を、無表情な少女に手渡した。五百TLというのは、トルコのどこの博物館でも払うことのない金である。

そこで見たカーペットの織り方を、簡単に説明しておこうか。織り機はというと、日本で風上げの時に使う糸巻を大きくしたものを連想してもらおうとよい。それが壁に立てかけてあり、風系のような縦糸が張ってある。はたの上の方には色とりどりに染められた横糸が、十五センチくらいにぎざまれてひっかかっている。その横糸を、一本ずつ手にとって、縦糸に巻きつけ、結わく・ぶっちぎる。これをくり返し、ある程度やると、板のへらでしごいて糸をつめる。最後に出来上がったら、表面をカットし、ならして平らにするらしい。カーペットも織り物だから、ふつうの織り物のように縦横織っていくのだろうと思っていたが、一本ずつ結わくとは知らなかった。見てみるものだ。しかし、わざわざやって見せるというのも、いまいち不自然で面白くない。ともかくも、礼をいってそこを出た。

街の方に戻って歩くが、どうもにがてなおっさんなので、私は博物館に行くからと言ってわかれようとした。するとおっさんは、

「ハジラールへ行きたいのなら、私が案内しよう。五時に仕事が終わるからインフォメーションの前で待ち合せよう。」と言う。

「車で送り迎えするから大丈夫だ」とも言う。

「Yes or No?」と聞くが、「Yes?」「Yes?」と、どうしても連れて行きたい雰囲気がある。OKした。

本当のところ若干疲れていた。夜行バスでディヤルバクルから夜っぴで走り、朝九時にカイセリに着いて、休まず外へ出たら朝から「じゅうたん攻撃」である。しかし、とりあえずハジラール行きはこのおっさんしか頼りはない。ともかく、売っている所よりも作っている所のほうが、はるかに私には興味があった。

博物館を見て街にもどると、また声をかけられた。こりずについてゆく私もどうかと思うが、けっこう楽しんでる。

こんどはお兄さん二人。二人ともジャケットを着ていて、他のトルコ人とは顔立ちが少し違う。一人のほうは目の色も少しく、ルート66のアメリカンタイプの良い男だ。

「オレたちのオフィスへ来いよ」 彼等の誘い方はまた違った。日本語を教えてください。ついて行くとそこは、小さな雑居ビルの三階だった。

例によってチャイを飲みながら、日本語・英語・トルコ語チャンポンで簡単な日本語を教えたりにしていたが、ころあいをみて、始まった。「うちの「キリム」はきれいだぜ」と言って、わきに積んである布を床に広げ始めた。

「キリムというのは、遊牧民がテントの一部に使ったり、ムスリムが礼拝時に下に敷いたりするのに用いられるらしいが、赤を基調とした、ざっくりとした柄の民族色豊かな厚手の布のことである。絨緞も長年使われて古くなった物に価値があるが、キリムも同様で、風や砂に長年洗われ、鮮かな色が落ち、どっしりとした風格の出たものが一種骨董的価値をもっている。そして又デザインもカーペット同様、昔からの伝統的模様を使っているものがよいらしい。それは古ければよいというものでもないらしいが、穴があいていたたり、そこが継ぎで修復されていても賞品価値をもつ。

イスタンブールで若い日本人旅行者の溜り場のようになっている「ユーリック（遊牧民）」という絨緞屋の主人から聞いたのだが、これを集めるためにトルコ各地の田舎を回って、遊牧民なことから買いつけてくるらしい。

確かにこの布は素朴で力強くて、色彩感覚豊かですばらしい。壁掛けとして最高のインテリアだ。おもわず手が出そうなものがある。

彼等はまだ二十枚も広げている。一枚だけ向こうが値をいったら、50\$だった。買えない値段ではない。が、そういういろいろ買うわけにもいかない。どうせ買うならカーペットだ。

私にはとても買えないよと言って、私は飯を食いに外に出た。すっかり昼飯を食いそびれてしまった。

夕方五時すぎにインフォメーションの前まで行くと、すでに彼らは待っていた。というのは、彼の他に同僚ひとりがいっしょだったからだ。三人で歩き出す。商店街をぬけてゆくと、小さなバス・ターミナルがあった。

走る約十五分。あたりはすっかり暗くなっている。バスを降りた私達は、広場の一角にある小さなオフィスの前にいた。

インフォメのおっさんが話をしている。「よし、行こう！」話がついたらしい。

そのボスらしき人物が、フォードの乗用車をもってきた。どこかへ行くらしい。車にのせられた時、もうひとりそこにいた松葉杖をついたおじさんも加わり、計五人になった。

暗くてよく地形がわからないのだが、急坂を登っているようだ。少し行くと、ある家の前についた。けっこう立派な家だ。中から女の人が出てきて、迎え入れてくれた。どうやら、ボスの自宅であるらしい。

通されたのは、二十畳ほどの広さの長方形の部屋で絨緞が敷きつめられ、まわりにはクラシックなつくりの椅子と小テーブルがいくつか並べられている。天井からはシャンデリアが下る。ボス他二人は向こう側で、私とおっさんはこちら側というようにめいめいが座る。そしてフロアの一方にはカーペットが積み重ねてあった。

ボスはトルコの中年男にしてはスリムな体型で、面長な顔立ちにととのった口ヒゲをはやしている。目は暖かな感じだ。インフォメのおっさんしか英語がわからないので、彼が通訳をする。といつても、向こうの話はすでに決まっていた。

私としては、思いがけない展開といえなくもない。……私は絨緞の生産地であるという村を見て、できれば作っているところも見せてもらって、ひよっとして安く小さな玄関マット程度のもので買えれば、と思っていたのだが……が、今の状況を考えるとどう見ても、絨緞を買いにきた日本人である。しかし、少なくともヤバイ雰囲気ではないようなので一応は安心していられる。

インフォメのおっさん、積んであるカーペットを広げ出す。どれも三畳ほどのものである。

「ちょっと大きすぎるなあ」

もうひとつの山を広げる。「これも大きいな」

「ハジラールではこの二種類のサイズしか作っていないんだ」

「こんなの持って歩けやしない」

「いや、たんでしまえばこんなに小さくなる」といって、たたむ。

「厚さもそう厚くはない。たったの三kgだ」

「しかしなあ」

「全部ウールだ」「オールハンドメイドだ」「このデザインを見る、伝統的な模様だ」「オリジナルだ」カーペットの柄を指さし、おっさんの言葉が段々に荒くなる。裏を返し、他のを見せ……

奥さんが、コーヒーをいれましようかと聞いてきたらしい。おっさんが私にコーヒーでいいかと聞く。その頃私はコーヒーはあまり飲まなかったので、いやチャイがもらいたいというと、おっさんは「何、紅茶？」と、せっかくここの人がコーヒーを出そうと言っているのに、といった



撫然とした顔でいう。

トルコでは日常茶飯事に飲む紅茶と違い、一時はなかなか手に入らなかったコーヒーは言わば格が違うのだろう。『そのコーヒーを出してくれるというのに、お前は飲まんのか』ほとんどぞんなふうに関こえた。

ボスは、まあまあという感じで紅茶の用意をさせてくれた。

少しして出てきたチャイは、普段町のチャイ屋で飲む薄いガラスではなく、繁華街のショウウインドウの中で見る高級なカットグラスのチャイコップに入ってきた。どうやらここはハジラルの元締め的な人物のお宅であるらしい。

「私はもっと小さいのがいいのだが」

「なに、小っちゃいのだけか」

おっさんのもとと陰しげな顔はますます険しくなり、私をたじろがせる。

「このやろう、手こずらせやがって。買わなきゃ帰さんぞ」ほとんどそう見えた。

ボスはじめ他の人は、完全に見物人である。インフォメのおっさんはボスに「このジャポonyaは英語もよくわからんようだぜ。」などといつている。こういうトルコ語はわかってしまう。

私は立ったままチャイのコップを持ち、下のカーペットを見比べ、迷っていた。すると、

「お茶を飲むのか、考えるのかどっちかにしたらどうだ。」と、もうあきれたといわんばかりである。私は「はっはっはっ」とわざと豪快に笑って、お茶を飲むことにしようとして椅子に戻ったがその笑い声に力はなかった。『こりゃ買わにゃ帰れんな』私はそう思い始めていた。

ボスと話をしているおっさんに向かって、小さいほうを指差し値段を聞いてみた。

「四万だ」

「もっと安くなんないのか？」

「ハジラルだからこの値段で買えるんだ。」

このおっさんはこういう話し方をする人なのだろうが、英語がわからないので聞き返したりすると、もう怒っているようである。

「あんたがツーリストだからこの値段なんだ。カイセリの街やイスタンブールで買ったなら、もっとえらい値段だぞ。」と言う。

この小さい方というのは、ちょうど襖三分の二ほどの大きさ。大きい方には左右対称の模様があったが、この小さい方はミヒラブ模様のもの三枚しかない。ちょっと普段使うのには模様特殊ではあった。ミヒラブ型に縁どられた中に木があり、鳥がとまっている。縁には花・鳥・鹿などが描かれている。

「どれがいい？」と聞く。値段を聞いたから、もう買ってもらうもんね。という感じである。

「――その時、なぜか突然停電――子供が蠟燭をもってきた。」

一時休戦となった暗らがりの中で、私は『もうめんどうや、買ってしまおう』と考えていた。ボスは、すぐつくよと言っていたが、なかなかつかない。

「電気つくまでまってるかい？」と、おっさん。

「そうだな」と、私。もう一度見比べて決めたかった。

——しかし、いっこうにつかない——

いつまでも暗闇の中でじっとしているのもいやになってきた。

ええい。今まで見ていて、なんとなく一番、色と柄がはっきりしていたような真ん中のやつを指差して、

「あいつが一番いいな」

ついに買ってしまった。三kgを。

\*

翌朝、宿を変えるため部屋を出ようとすると、隣の部屋のドアが開いていて、何とホテルのしたのカーペット屋のおっさんが髭をそっていた。挨拶。カーペットのこと何もいわなかったから、もう連絡はついているのだろう。インフォメのおっさんが友達だといっていたから。

私は三kgをしょってホテルを出た。

安いホテルに荷物を預け、私はこんどはひとりでハジラール行きバスに乗った。昨日で行き方は分った。昨日は暗くて、村の様子もなにもさっぱり分らなかった所をもう一度見てみたかった。

街を離れると少しづつ上り坂を、ちょうどエルジェスに向かって走る。ハジラールに近くなると、一戸建ての庭付きの新しい大きな家が目につきた。裕福な人が郊外に住宅をついているのだろう。

ハジラールに着く。バス停の近くに広場があり、小さな市がたっていた。近隣の人々が農作物を持ちよって売買しているのだろう。ロバに乗ったおじさんが買物に来ている。

ハジラールの村は、ちょうどこの広場を中心として扇型に広がっている。が、広場を離れると地面は急速に高くなり、段々に連なる民家はローマ時代の劇場を思わせる。その左手に真っ白に輝くエルジェスがのぞいている。

昨日の事務所がどこなのか見当もつかない。まして連れていかれた家がどのへんなのだから今明るい春の陽に照らされた広場を見ると、昨夜のことが夢のように感じる。

向こうから男の声がした。

「JAPON！」 振り向くと昨日あの家で同席していた松葉杖のおじさんだ。

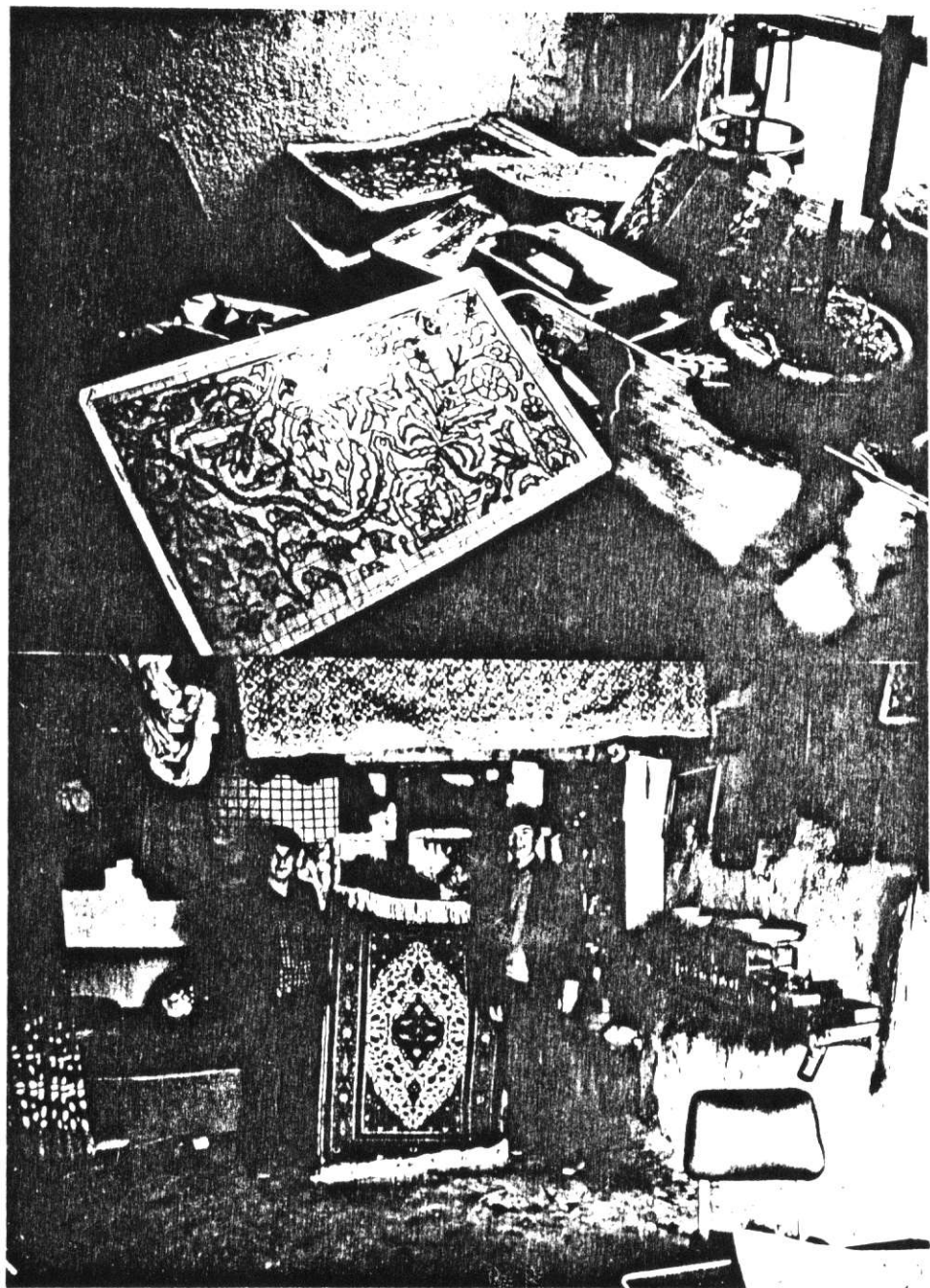
「カーペット？」

私は「ハユル、テシキユール（No, Thank you）！」といって、道を上っていった。

広い道は少し行くとすぐ狭い二又に分れ、あとはごちゃごちゃした、民家に踏み込んでゆくような道しかない。戸口に立っていた男に手振りで『エルジェスを見たい』と言うと、あっちへ行けばよく見えると教えてくれた。そこは誰かの家の屋根らしかった。山が光っている。

広場に戻る途中、道に面した家の窓の中に、カーペットの模様を見た。近づいてみるとそれは方眼紙に色鉛筆で塗り分けられたテキスト用紙だった。私のがぞきこむと、中にいた二人の少年が入れとドアを開けてくれた。仕事場らしい。織り機が一台立て掛けてあり、横の棚には染められた糸が置かれている。

少年が隅に丸めてあった一枚のカーペットを広げて見せてくれた。模様が細かく色合いも落ち



つたいいい物だ。ためしに値段を聞いてみた。が、彼等には答えられないらしい。もともと売るつもりで私を中に入れたわけではないことは、初めから知れた。写真を撮らせてもらい、出る。広場の角に駄菓子屋のような万屋のような店があった。私は何か飲物でもないかと思っのぞいてみたが手頃なものはない。表で店番をしている体格のいい若い男は、トルコの屋外のチャイ屋でどこでも使っているような小さな椅子に腰掛け、客が来るとこれまた小さな店に体をすぼめるようにして入ってゆく。

彼は私に、まあちょっと休んでいけよと、タバコを差し出し、二つ使っていた椅子の一つを開けてくれた。彼は別に何も話かけてこない。

私がトルコ語で、エルジェスはとても美しい山だと言うと、彼は無言でうなずいていた。



## キユタファイアのトルコ・ブルー

首都アンカラを離れ、エスキシェヒールという町に寄った。めずらしく町のまん中にバスガラジがある。

ガラジ前のホテルに荷物を預け歩き始めたら、幅五、六メートル程の小さな川に出会った。川に沿ってメイン・ストリートが走っている。町の中にこんな小川が流れているところは、トルコ広しといえどそうはない。通りを右に曲り少し行くと、小さな市場があった。市場といっても市民の買物の場である。その市場の裏手に川は続き、そのあたりは少し深くなっている。川っぺりにレストラン（ロカント）がある。なんとなく雰囲気、東京都内を流れる神田川に似ている。

エスキシェヒールの町は二つのことで知られている。一つは海泡石のパイプの産地として。もうひとつはソ連タートル系の間が多くなる町として。

海泡石のパイプというのは、真白な石に人の頭部等を彫刻したパイプで、長年使用する内にヤニによって蝋色に染まっていくというものだ。名産というから、この町のどこでも作っていてそこら中に店が並んでいるのかと思つて来たのだが、それがまったく見あたらない。専門店が一軒あったが、あとはガラジの土産物屋に安物が並んでいるだけで、そう大量に作られているというでもないらしい。

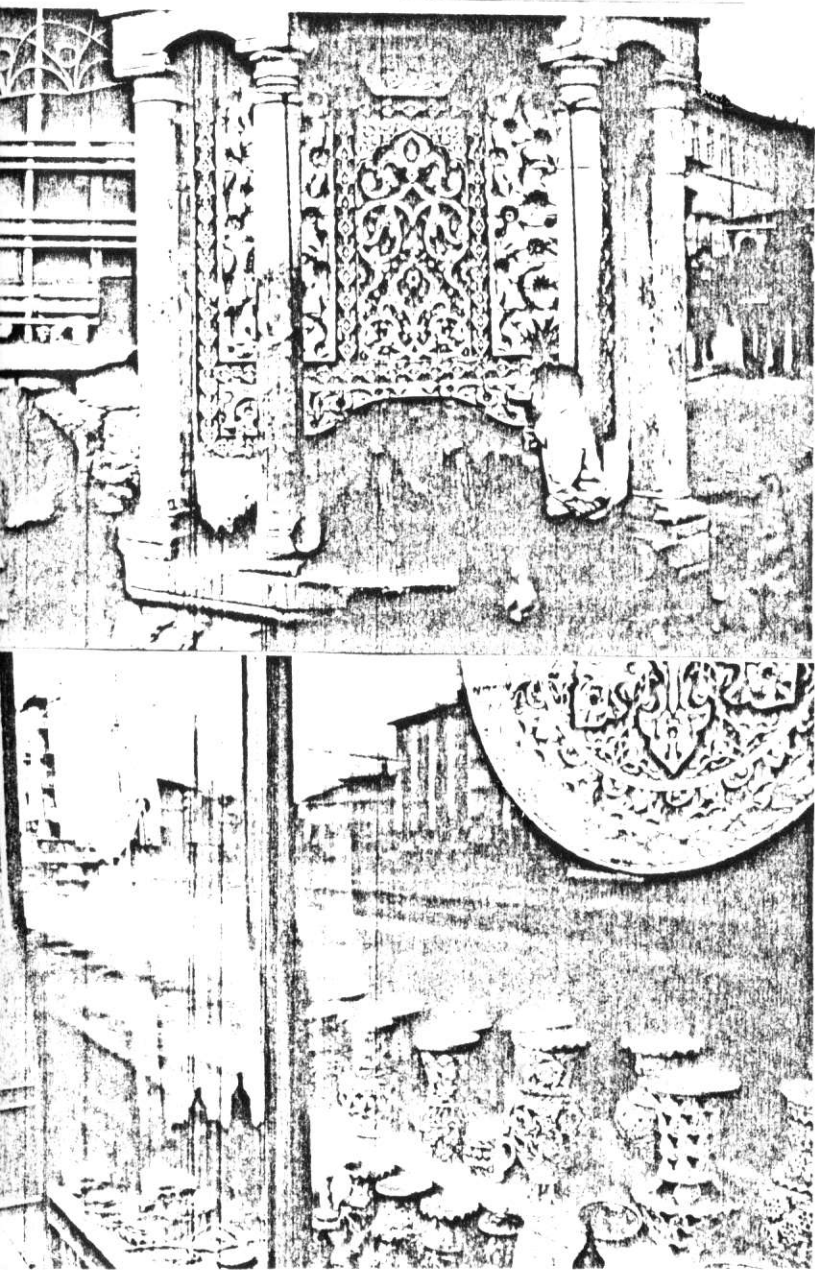
歩いていて、ちょっとした露地を入った所の、極普通のオフィスのような店で、石を彫っているのを目にした。小刀で白い石を少しずつ削ってゆくようである。中に入って見せてもらった。石といっても、石膏のような質感である。きめ細かく、柔らかく、そのかわり粘性があつて大きくは割れにくい、そんな石らしい。

テーブルの脇に、出来上がったパイプがゴロゴロ入っているボール箱があった。手に取つて見て見たが、いまいち良い物とは思えない。その中の物は、売りには出せぬはねものらしい。あるいはガラジの土産物屋にも行くのかも。完璧なものはないのだろう。それだけに精巧に仕上がったものには希少価値が出る。後日イスタンブールのグランド・バザールで見た一本ずつ布張りの箱に入ったパイプは逸品だった。もちろん目の玉の飛び出るような値段が付いていたが。そして、このような本当に良いものは、皆イスタンブールとかアンカラに行つてしまうのだろう。

タートル人というのがどういう人なのかまったく知識も面識もなかったが、日本人によく似ているということだった。これは本当だった。若い人はそうでもないのだが、おっさんおばさんクラスになると、これはもうそっくりである。あつ山田さん、おや鈴木さんの奥さん、という雰囲気である。トルコ人と一般的にいつても、種々雑多ではあるが、日本人の顔つきとはかなり違う。どちらかといえば、西洋人の顔つきで、東洋人ばい顔はめつたに見ない。そんな中でめずらしくモンゴルの顔に出会つた町だった。

そのエスキシェヒールからバスで一時間半程のところ、キユタファイアという街がある。現在のトルコの陶器、タイルはほとんどここで生産されている。トルコタイルの装飾的な色・柄の美

町角の水飲み場と陶器店

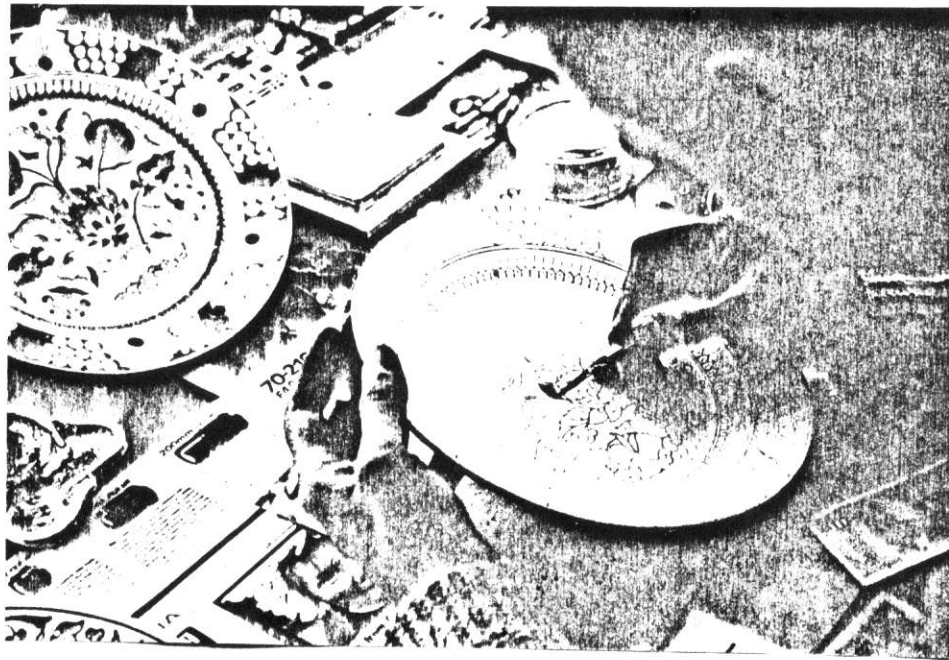


しさは並ではない。昔はもう少し北のイズニックが産地だったらしいが、今はより良質の粘土がとれるということで、キュタフィアがその中心になっている。

イズニックのタイル生産は、ペルシャから来た陶工によって始められた。古いジャミイ（モスク）の内部を飾るタイルは、どこもイズニック産だ。そしてその技術、伝統的模様は現在キュタフィアに於いて受け継がれている。上に下に絡み合いながら続いていくイスラムの連続模様の繊細な美しさには目を見張るものがある。私は陶器というものも好きだから、是非ここで作っている所を見てみたいと思っていた。

キュタフィアのガラスは町外れにあったのだが、旅行者の勘で人の流れる方についてゆくと、はたして町の中心部に出た。役所があって、ツーリスト・インフォメーションの看板が目に入った。オフィスにいたたった一人の年配の男が町の観光局の職員であるらしい。ガイドブックに書かれていた、「イエニマハレ」に行きたいのだが、と聞く。英語は通じなくとも、こちらの言わんとするところは解したらしく、工場で作られた製品のカタログなどを出して見せてくれた。そしてとても地図とは思えないような、線が五、六本引いてあるだけの地図を書いて私に手渡した。とにかく大体の方向はわかったので、歩き出す。陶器店がいっぱいある。のぞくのは後回しにするが、こういう町は楽しい。三人も四人もに道を聞いただろうか。雑貨屋の表にいた兄さんが「よしついてこい」と、いっしょに歩き出した。インフォメーションでキリセ、キリセといったが、少しゆくとキリセがあった。キリスト教の教会のことである。今も使われている教会なのか、過去の遺物なのかはわからない。

キリセを越してさらにゆくと、前方に建物が見えてきた。ここだよという。そこは益子あたりの工房に比べると、いかにも工場という感じがする。兄さんが、何だかんだとどういったのかわからないが、見学の許可をとってくれた。



絵付け……上は工場の一室。若い女の子ばかり4・5人で仕事をしていた。下は写真屋さん。

見学を終えて町へ戻る途中、ちょっと休んでいこうと一軒の陶器屋に入った。彼の知り合いの店らしい。チャイを飲みながら店を見回す。買わなきゃ悪いかなと思いつながら、いざ一枚となるとなかなか決まらない。結局ブルー系の色でまとめられた、二十五センチくらいの皿を買う。兄さんの店の向かいには写真屋だった。二人で今度はそこに入る。写真屋さんは英語が話せるという。

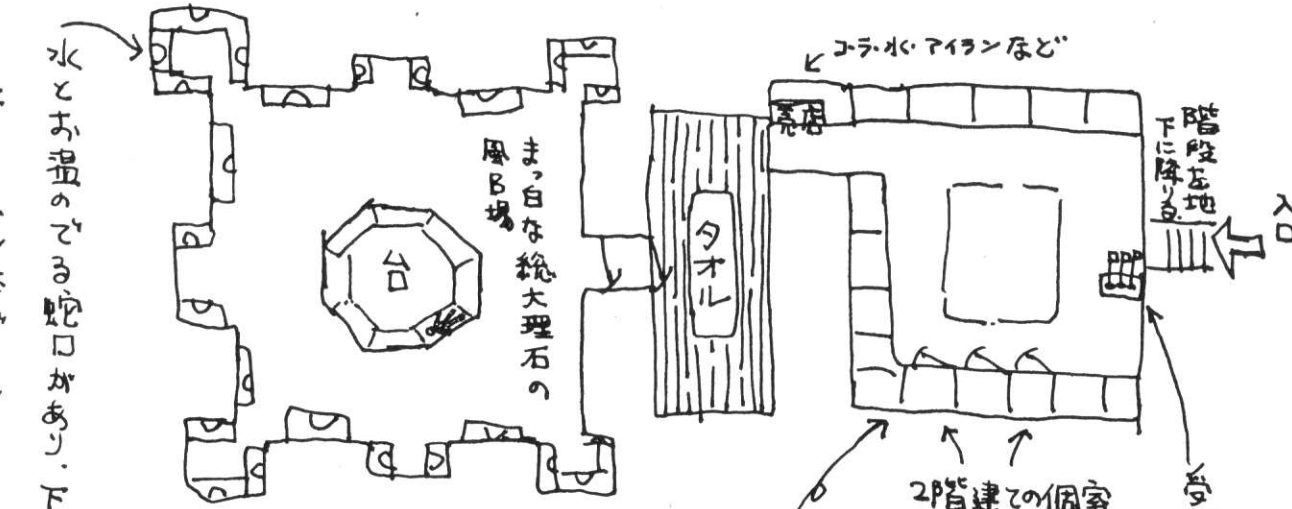
写真屋といっても一般にはまだ、一家に一台もカメラの普及していないトルコのこと。いってみれば町の写真館である。二組ほど、子供づれのおかあさんといった人達が写真をとりにきたがそのたんに写真屋さんはスチール機の引き出しから、一時代前の三十五ミリ一眼レフを取り出して、隣のスタジオに入ってゆく。撮影はあっという間に終わる。日本のフィルムは安いけどダックは高いよなどというって、私のミノルタX7000に関心は示したものの、こういう最新式はトルコでは必要ないという様子だった。

そしてこの写真屋さん、副業に皿の絵付けをやっている。デスクの上に塗りかけの皿一枚、それと絵筆、絵具がのっている。写真をとらせてくれという、もう一枚線描きだけできている皿を手にとって、新しく塗り始めてくれた。彼の英語も極僅かだけど話もできなかったが、この日は良い一日だった。

# ハمام エスキ・カプルジャ

トルコ風呂という名称を日本人は皆知っている。先頃この呼名は廃止されたが、世間で正しい意味合いに取られるのにはまだ大分時が必要だろう。ハمامとは「トルコの風呂」を言う。前の旅行記でもハمامについてはほとんどふれなかったもので、今回少し詳しく書いてみよう。前の旅ではイスタンブールの半ば観光客向けといった高級な所に一度入ったきりだが、今度はイスタンブール・バン・ブルサといった町で計三回入る機会があった。ハمامというのは、一口でいえば「蒸し風呂」。つまり蒸気が出ている。北欧などにあり、日本でもはやっているサウナとは違う。どんな風になっているかという点、これは図解入りで説明したほうがわかりやすい。妹尾河童さんのように絵が描ければ良いのだが、そうはいかない。ごく幼稚な平面図しか描けないが、とにかく、最高！なのだ。

1980年に入った高級ハمام  
(ガイドブックにも載っていて 清潔・安心だが へらぼうに高い)  
イスタンブール



英仏独日語で書かれたメニューで好きなものをえらぶ。

1. セルフサービス
  2. 身体洗い付き
  3. 身体洗い & マッサージ付き
  4. スルタン風
- の4ランク

鍵がかかるから安心。ゴム輪がついているから、腕にはめておくとなくす心配なし。

→ それほど熱気でけむるようなわけではなく、かなり室内の温度は高い。

真中に50cm位の八角形の台(もちろん大理石)があり、その上で、身体洗いや、マッサージをやることになる。筋肉隆々、ヒゲ、胸毛。日本風に比べると助のおっさんがびこる。

水とお湯のどる蛇口があり、下は大理石を掘り穿めた洗面台になっていゝ。長くると、身体がカッコしてくる。水やお湯をかぶりながら、うたがうたがうと過します。これはお風呂の醍醐味です。

身体洗いというのは、手袋式になったへちまのようなもので、もっぱら垢こすり。とにかくポロポロ出る。皮膚が赤むけするんじゃないかと思うほどこすられるが、気持ちがいい。当然上がったあとは、一皮むけたさっぱりした気分になれる。

マッサージとなると、腕をとってぐわーっと引張られ、首をねじ曲げられ、思わずウォー・ワー・ギブアップギブアップ!!

その大理石の台の上に仰向けに寝ると、丸天井の蒸気抜けの穴から陽が差込むのが見え、おー極楽極楽という感じになる。

いかげんほってそろそろ出るかと戻っていくと、途中のタオルをたくさん置いてある板の間でつかまった。なんだと思ったら、濡れた腰布を乾いた大きなバスタオルに取り替えてくれた腰に一枚巻き、肩にもう一枚。

部屋に戻ってもすぐ着替えて帰ったりしてはいけない。売店でアイラン(ヨーグルト飲料)など買って、ビニールシートの長椅子に横になったりしてほてりを静めてから帰ろう。いつまでいたって追出されることはない。

このハマムは隣が女子用になっている。路地を曲がった脇から入るのだが、中の作りはほとんど同じらしい。ただ、三助のかわりに相撲取りのようなおばさんがいるそうである。

\*

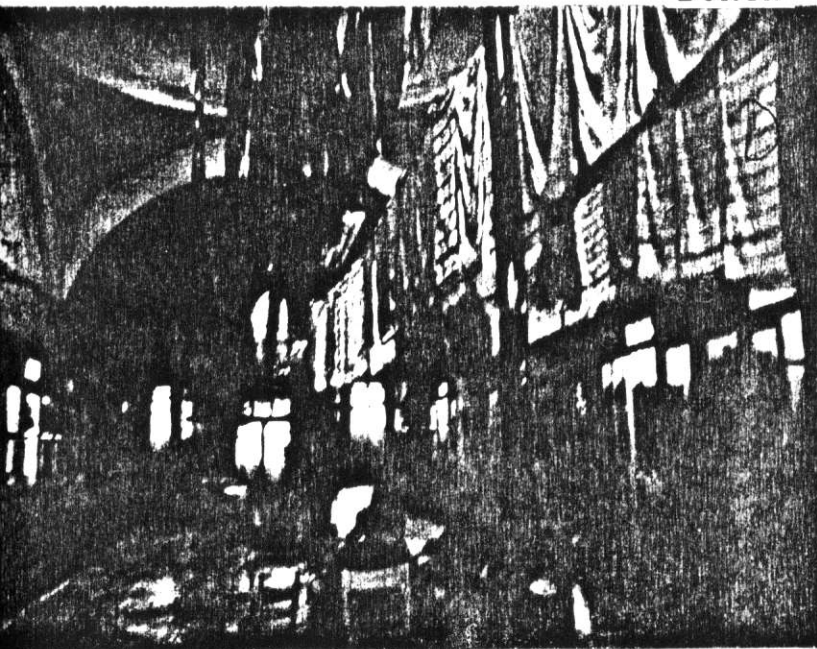
今度イスタンブールではいったところはスルタン・アフメット通りのグラランド・バザール入口あたりであった所。一般庶民向け?。ここはマッサージ付きで千丁し。先の所をちょっとのぞいたらたしか、二千・三千という値段だったから、それに比べれば安い、都会はやはり高いととて気付く。

中の様子はあまり変わらない。安い分だけ造りが小さく、飾り気がない。ここは、詳細省略。



Hamami ESKI KAPLICA

BURSA

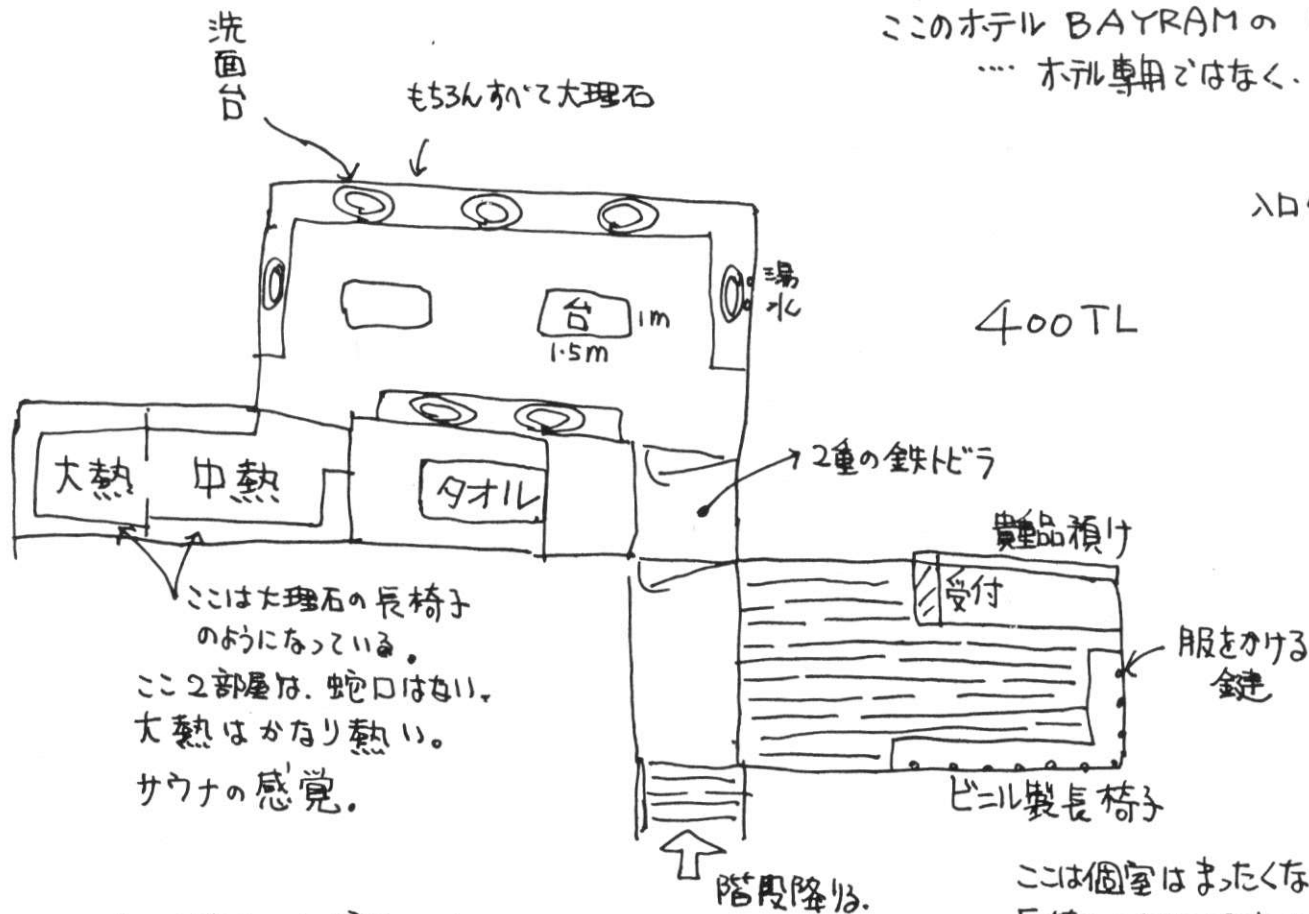




バン (東部アフリカにある。バン湖という塩分の濃い湖のほとり  
にある街)

このホテル BAYRAM の HAMAM

… ホテル専用ではなく、ホテルの隣に別の入口がある。



(小学生くらいの)

入口の階段わきには 男の子 2人がいる

小部屋があり、



ここに靴を預け、ビニルのサンダルにはきかえて、階段を降りてゆく。

靴は No のついた札がつけられ、同じ番号の札を ひきかえ用にくれる。水にぬれても大丈夫なように、



← ビニルで「つんだ」厚紙。

店の人間なのか、客なのか  
わからないが。いっしょに  
入っていた男が、そこに座  
ると、まん中の台を指さし、  
垢こすりをやってくれた。

ここは個室はまったくなし。  
長椅子の上に服をひかける  
鍵がらいていて、そこに  
ぬいだものは、パンツから  
コートまで、うまいとこ、ひ  
かける。

風呂上りも、ここで休憩。  
飲みものは、受付にある。



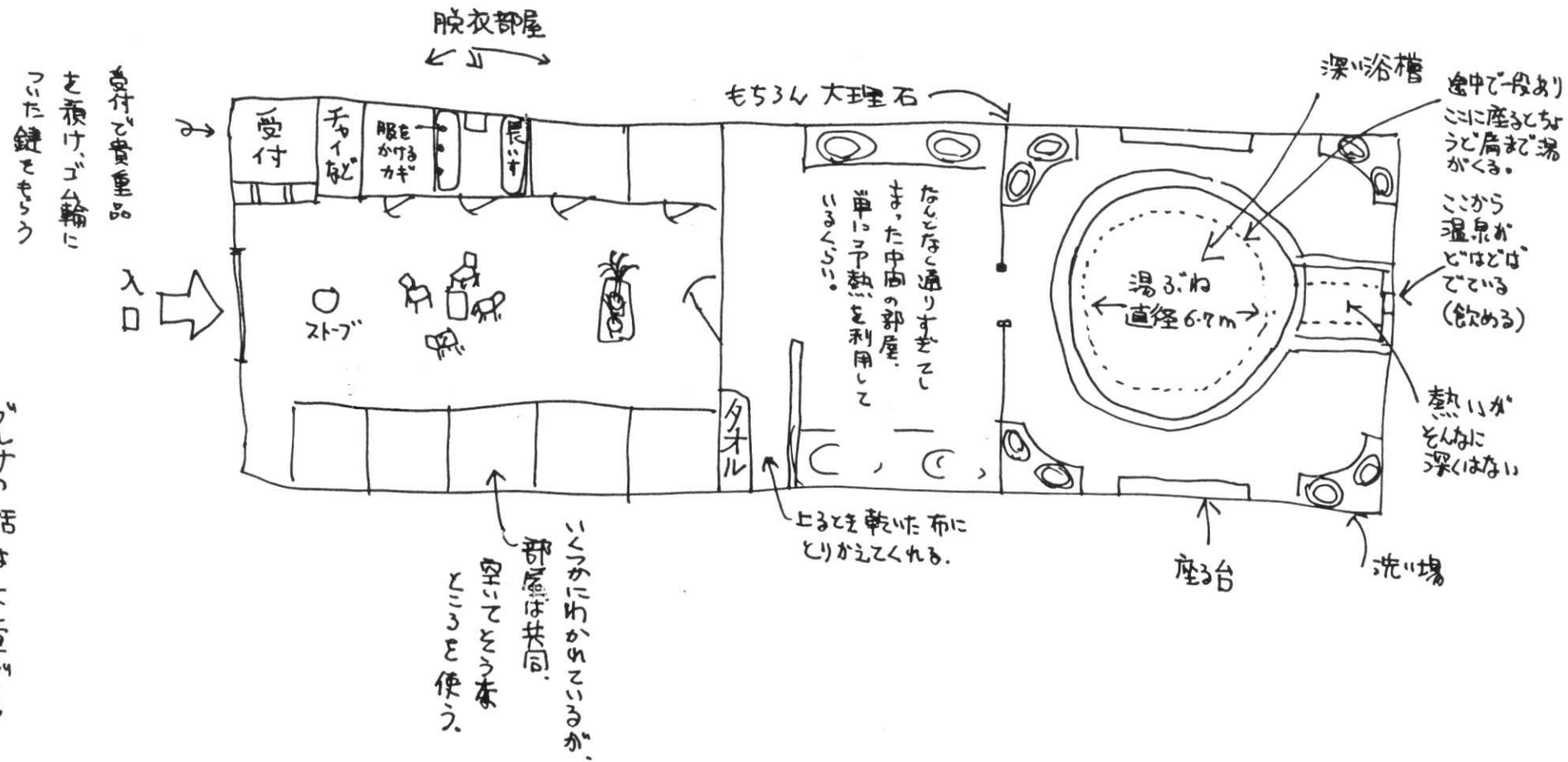
ブルサ (イスタンブールから200km程のところにある古都)

トルコのハمامにふつう浴槽はないのだが、ここにはある。温泉が豊富にでるのだから、当然といえば当然の起結。かわりに、マッサージなどしてくる台はなし。(もしかしたら、中肉の部屋でやってくれるのかも?) したがって、気分は日本の温泉そのまんま。

オスマン・トルコの2代目君主オレハンが、東ローマ帝国から奪いとり、首都とした。市内には古いジャーミ- (モスク)、オスマン朝君主の廟がある。

市の面方にチェキルゲ (Çekirge) というところがあり、温泉が出る。イスキカプリヤ (Eski Kaplica) とは古い温泉という意味だが、そのままの名のハمام (Hamami) を紹介しよう。

220TL



ブルサの話は女首で

ブルサは今ひとつ天候がよくなかった。東部を抜け、南に降りてきた頃からあれほどあった雪は消えていたが、木々の緑に気づいたのはここに着いてからだ。春の訪れが、春の雨を呼んでいた。ブルサの春の気候は日本とよく似ている。雨といっても霧雨のようなもので、花曇りといった日が続いた。

私がハمامに行った日もそんな天気だった。市街のなだらかな坂道を西に向かっていけば温泉のあるチェキルゲに出る。どの位離れているのかはよくわからなかったのだがのんびりと歩いていけば、そのうち着くだろう。そう遠くはないはずだ。

市街を抜け大きなスタジアムに隣接した公園のわきを通りしばらく行くと、左側にブルサで最大のホテル、しかも大温泉浴場があるという「チェリクパラス」が見えた。かなり立派な感じで日本でいえばさしずめ何とかグランドホテルといった名前がきつと付くようなところだ。しかしこの辺りは道路に面して近代的な建物が整然と並び、温泉街という雰囲気ではない。無論、私としても日本的な温泉街を連想していたわけではない。外国の場合どこでもそうだが温泉は歓楽地ではなく、保養地といった意味合いのほうが近い。日本でいえば湯治場である。私はそんな雰囲気求めていた。このあたりは私の探しているエスキ・カプルジャ（古い温泉）ではなくイエニ・カプルジャ（新しい温泉）らしい。

なおも歩くとようやく少し町らしくなってきた。商店などもある。バス停がある。さらに行く道は二又に別れていた。右に行ったのではまた町から外れてしまいそうなので左に行ってみることにした。

少し狭くなった道を行くと小さなホテルが目につきました。しかし、私の探しているハمام（公衆浴場）は見当たらない。いかげん腹もへってきた。ちょうど一軒のピデ屋があったのでまずは腹ごしらえと、飛びこむ。ピデというのはいわゆるピザ。イタリアのピザほど種類も豊富ではなく、ピデ専門店というのもそうはないのだが、カマドで焼いたこいつはうまい。チーズのピデを頼む。といつてもなにがあるのか分からないから、ピデ？と聞くのをピデ！

チーズ？と聞くのをチーズ！

アイラン？と聞くのをアイラン！と、おうむ返しに答えただけなのだが、これがまたうまかった。

チーズはトルコの塩味のきいた白いチーズ。これが丸い木地の上のっているのではなく、木地に包みこんで焼いてあった。10cm X 25cm位あったからかなり食いでもある。アイラン二本飲んで、470TLかなりのポリウムで腹も満ちた。金を払いながらハمامを聞くと、どうやら通り越してきてしまったらしい。

道を戻るとハمام エスキ・カプルジャはちょうど二又の角っこにあった。ただ道路から少しさがったところにあつたので気がつかなかったらしい。

カメラのはいったバッグごと受けに預け、ゴム輪のついた鍵をもらう。トルコのハمامはどこも安心だ。着替えをする小部屋は個室ではない。先客の服が上のフックにかかっている。空いていそうなところを共同で使うらしい。したがって部屋に鍵はかからない。服を脱いで、いつもの大きなしましまの木綿布を腰に巻く。布は大きいし、濡れればくっつくからまず落ちることは

ない。

木のサンダルをはいて、中まで入ってゆく。まん中には大理石の台のかわりに、まん丸い大きな浴槽があった。直径が6m位はあるか。中は途中で階段状になっていて、そこに腰かけるとちょうど湯が肩の位置にくる。

うーん、これではなくては……

気分はすっかり日本の温泉である。ところが、ここはちょっと違う。さっきからバツシャーン・ザップーンと飛び込んでいる奴が何人もいる。湯につかっていると頭からしぶきがかかる。空中で一回転してから飛び込むというわざをみせる奴もいて、プールがわりだ。

その浴室の壁ぎわは、体を洗うための場所だが、その合間合間に大理石の腰掛けになった台がある。湯から出てそこに座っていると、だんだん体がカッカしてくる。部屋全体がスチームでかなりの温度になっているらしい。

隣で壁によっかかっていた奴が、飛び込まないのか？と言う。深いだろうと聞くと、いや首までだと言う。飛び込んでもいいのだが、浮かんでこなかったりすると困るし、第一風呂で溺れたりしたのでは恥だからやめにした。

丸い浴槽の一方には四角い小さな浴槽が付いている。ちょうど入口から見ると正面の側なのだがその壁から湯がこんこんと湧きでて、四角い浴槽に注いでいる。日本でも温泉によくこういうのがある。この四角いところはせいぜい大人四人も入れればいっぱいという広さしかないが、湯の温度が熱い。深さは立つと胸くらいまでで、こちらのほうが、日本の風呂に近い。若い奴は丸風呂で泳ぎ、年配はこっちでつかる。見ていると、沸きでる湯を手を受けて皆飲んでいいる。日本ではつかっても、あまり飲むことはないが、外国の療養を目的とした温泉地ではわざわざ飲料用の場所がつくられていたりもする。あまりいっぺんにたくさん飲んでしまうのはかえってまずいらしいが、一定量を続ければ温泉の中に含まれる成分が薬になる。私も飲んでみたが、ここのはさっぱりしていて、湯も透明感が高く、日本で「単純温泉」と区分されるものだろう。

湯につかったり、休んだりとかなりゆっくり入っていたが、体のほてりが、もう限界という感じになってしまったので、出ることにした。乾いたタオルに取り替えてもらい、部屋で休んでいるとしばらくして、もう一枚バスタオルをもってきてくれた。これが乾いているが、熱いタオルで気持ち良い。

アイランを飲みながらしばらくタオルにくるまっていると、少しずつほてりもおさまってくるもうそろそろいいかなと思うところあいを計って服を着る。タバコを一服したくなった。日本の風呂屋でいえば、脱衣場の板の間という感じだが、コンクリのた・た・きのそんな雰囲気所にテーブルと椅子がある。タバコをすっている間によく汗もひく。上を見上げるとカラフルな腰布をずらっと並べて干してあった。

外人の団体が見学にきて、入口から写真をとってすぐいってしまった。風呂はやっぱり入らなくては。

帰り際、ストーブのわきに寝転んでいた猫を写真に撮ろうと思っていたら、カバンを受取った瞬間に起きあがって行ってしまった。感づかれたらしい。

## 再び イスタンプル

千九八五年二月、再びイスタンプル。雪がまだまだ残り、道路脇に固まっている。それでも昼間、春の訪れを感じさせる陽の光はその土やほこり混じりの雪の塊を徐々に溶かし、道は泥沼になる。近所の人なのだか役所で雇われた人間なのかは分らないが、あちこちでコートに烏打ち帽の男達が、スコップや棒を持って氷のようになった雪を砕いては車道に投じている。陽のあたる所はまだいい。グランド・バザレ脇の狭い急坂など、一日中陽の当たらぬ場所など、いくら固まった雪を砕いても夜のうちにまたすぐ雪溶け水は凍ってしまい、タクシーなんぞ尻を振りながらあえいでいる。この前来た時の真夏のあのメチャクチャな暑さとはえらい違いだ。

夏にはさんざんいたガラタ橋付近の物売りも少ない。アイラン・ラマシン・シミット・ジュース・絵葉書・国旗・水・ボールペン・ピストルのおもちゃ・ライターの芯・その他なんだかよくわからない物売りがいっぱいいた。もちろん靴磨きもいっぱい出ていた。が、今まだ冬明けやらぬ頃。空気はしんと冷えている。

オレンジを満載にしたトラックが一台ガラタ橋前の広場（イエニ・モスクの前というべきか）に荷台を開いて商売している。オレンジ1kg 110 TL。55円というところだ。ここで買ったやつを黒海フェリーに持ちこんだのだが、このトルコのオレンジはバレンシアオレンジに似てめっぽううまい。ほかにはというと、ズボン屋が何人かいる。ズボン屋といってもシートの上にズボンを並べ、道行く人に声をかけているのだが、このへん「浅草」もしくは「ギャンブル場前」を思わせる。

この国の露店にも規則はあるらしい。許可をとって公認されたものと、そうでないものがあるのだろう。そんな訳でここにも時々、ポリスのジープが乗り込んでくる。すると、かのやばいズボン屋はシートの端に結びつけてあるロープをひっ掴んで、すばやく路地に逃げ込む。たいていの場合、二・三人のさくららしき仲間とともに走るのだが、慣れているせいか彼等の逃げ足はめっぽう速い。ところが何せ今の時期、下は泥。水上スキーよろしく物凄い勢いでシートを引っ張っていくのだが、肝腎な商品の上にははねがビシバシと飛んでいる。

いっぽうポリスはというと、車から降りることはまずない。といってもまだ寒いからなのかもしれないのだが、よほど悪どくない限り追いかけて掴まえようなどとはしないようだ。いってみれば見のがしている訳なのだが、公務上一応は姿勢を見せるといふことらしい。ポリスが引きあげれば、路地で様子を見ていたズボン屋が再び登場するは当然のことである。

同じことが靴磨きにもいえる。初めて見た時あまりのゴーカさにぶったまげた金ピカのどかい靴磨き台を構えている人は公認だろう。しかしトルコではこれらの人々のほかに肩紐を付けた小箱をしょって公園などをまわっている靴磨きが大勢いる。彼等のほとんどはまだ子供で、十歳から十五歳位の少年が多い。箱の中には靴墨などの道具。手には仕事をする時自分が座るための簡単な小さな椅子、あるいは缶空なんかを持っている。

靴磨きをやるのに許可があるのかどうかは分らないが、公園などで彼等はしばしば管理人に追い払われている。が、よく見ていると、その時商売中（つまり、靴磨きの最中）の子供にはなにも言わない。そして、いくら追っ払ったってすぐ戻って来ることも又、管理人は知っている。

ところで、この靴磨き。やはりうまいのとへたなのがいる。それも概して年齢に比例している。ちよっと年のいった少年だとかかなり光るが、豆ガキだとまだまねをしてやっているという感じでむらがかなりある。うるさい客などいちいち指さしてここをもっと、こっちもまだだと、指図している。なかには布をとって自分で磨きだしてしまう客もいる。靴墨を塗るときは指にとって両方の指の腹で塗っていく。どこでも誰でもそうだから、トルコではこれが正しい靴の磨き方なのだろう。日本でも外で靴を磨いてもらったことなど一度もない人間は、相手がガキでも　あーわりいなあ　という気になる。おかげで彼等の手の平はいつも真っ黒。

公園などでベンチに座っていると必ず彼等がやってくる。「靴磨き、どう？」多いとこだと十人ほどもいれかわりたちかわり声をかけてくる。私が前トルコに来たときは結局一回も磨いてはもらわなかったが、この子供の靴磨き攻勢には癩易し、ついに黒のマジックで茶の革の短ブーツをしましまに塗ってしまった。これならやつらも、黒の靴墨を使うかそれとも茶を使ったほうがいいのかと迷い、面倒な靴をはいた奴には声をかけてこないんじゃないかと思ったのだが、甘かった。やつらはたとえゴムサンダルをはいても声をかけてくるのだった。

\*

前に来たことがあるとはいえ、五年前。ましてトルコではそのときの物の値段など来たばかりの頃はほとんど役にはたたない。少しいると当時の五・六倍だなど、おおよその感じがつかめ、  
「五年前」も役にたってくるのだが。そんなイスタンブルに入って五日目。

この日は、イスタンブルでいっしょだった丁君がプルサに向かうというので、彼を見送りに、そして私は黒海岸にあるシレという小さな町までバスでいってみるつもりだった。

私達はガラタ橋からフェリーに乗りアジア側のハーレムに渡った。ここにハーレムガラジすなわちバスステーションがある。

イスタンブルのフェリーも楽しい。香港のスターフェリーにも似て、毎日通勤客・買物客などでにぎわっている。

私達の座った席の横に息子をつれた父親が座った。手に包みを持っている。前のテーブルにさっそく広げたのをみたらボレイだった。「ボレイ」というのはいわゆるパイのことなのだが、お菓子のようなパリパリしたものではなく、ちよっとぎょうざの皮に近い。この皮にチーズあるいはいためたひき肉をのせ、段々に積みかさねて焼くのだが、これもうまい。トルコ人は朝飯によくこれを食べる。親父さんは私達にも「食うかね？」と勧めてくれた。

イスタンブルからシレまではバスで約二時間。刺繍のことをトルコ語でペジというらしいが、ここのシレペジというのがいいらしい。プルサ行き丁君と別れ、私はシレに行くバスを探したが見つからない。聞いてみるとウシュクダラから出ていると言う。私はミニバスでウシュクダラに移動した。

ウシュクダラはハーレムよりもう少し北。といってもバスで10分位で着いてしまう。ここにもフェリーが着く。

バスのチケットを買い、出発までまだ時間があるので、私はフェリー乗り場前の広場にあるベンチに座り、フェリーから降りてくる人なんかを眺めていたのだが、そこに登場したのが、靴磨きのおっさんだった。

「ジャボン？靴磨きはどうかだい？」

まったく始めてだったのだが、頼むことにした。なにしろここ毎日雪溶けのイスタンブルを歩きまわっているものだから、私の靴は完全に泥にまみれていた。烏打ち帽のおっさんは肩から木箱を下ろし、靴墨などを取り出すと私の一方の足をその上にのせて磨きだした。ブラシをかけ泥を落とす。そろえた手の指で靴墨を塗る。

このおっさん英語を少し話す。

「イスタンブルに来て何日目だい？」と。

おっさん、靴墨を両方の靴に塗りたくったところでなぜか急に落着かないそぶりを見せ、立ち上がってここはやばい。ポリスが来る。やつらは蹴つとばして追い払うんだと、アクションをまじえて言う。

私はこれだけで金とって逃げられるのかなとも思ったが、そうではなかった。向こうの方でやろうと言う。このままではどのみちしかたないのでと、ついていったのが運のつき。

おっさんは広場脇の車が駐車してある間に入って行って、ここならいいと言って続きを始めた。ここはほぼ外からは死角になっている。

おっさんはなにげないそぶりで仕事をしながら話かけるが、どうも怪しい。

「日本の金を見せてくれないか？」などというが、出してみてもその日本の金よりも、一緒に財布に入っているトルコ紙幣に興味があるらしいことが薄々感じられる。

あとで気づいたことではあるが、これらはみな彼等の常套手段。来たばかりでこの国の金の価値もわからない人間を掴まえ、トルコリラをいくら持っているか確めた上で、ふっかけようというわけだ。やばい雰囲気だなど思っていたら案の定、いざ終わって金を払う段になったらふっかけてきた。2000TLだと言う。

私もようやく今のトルコの金銭価値が解り始めてきたとはいえ、靴磨きは初めて。しかし、はまってしまったからにはしかたない。値切るしかない。「200しかだせないぜ」——「いや1000はもらわなくっちゃあわないぜ」——「馬鹿いえ。普通は100だろうが」(と、知ったかぶりをして)「しょうがない。300出すよ」——「ダメ、800」——「よーし500。ラストプライスだ。」と、いう訳で結局500TL渡してしまった。

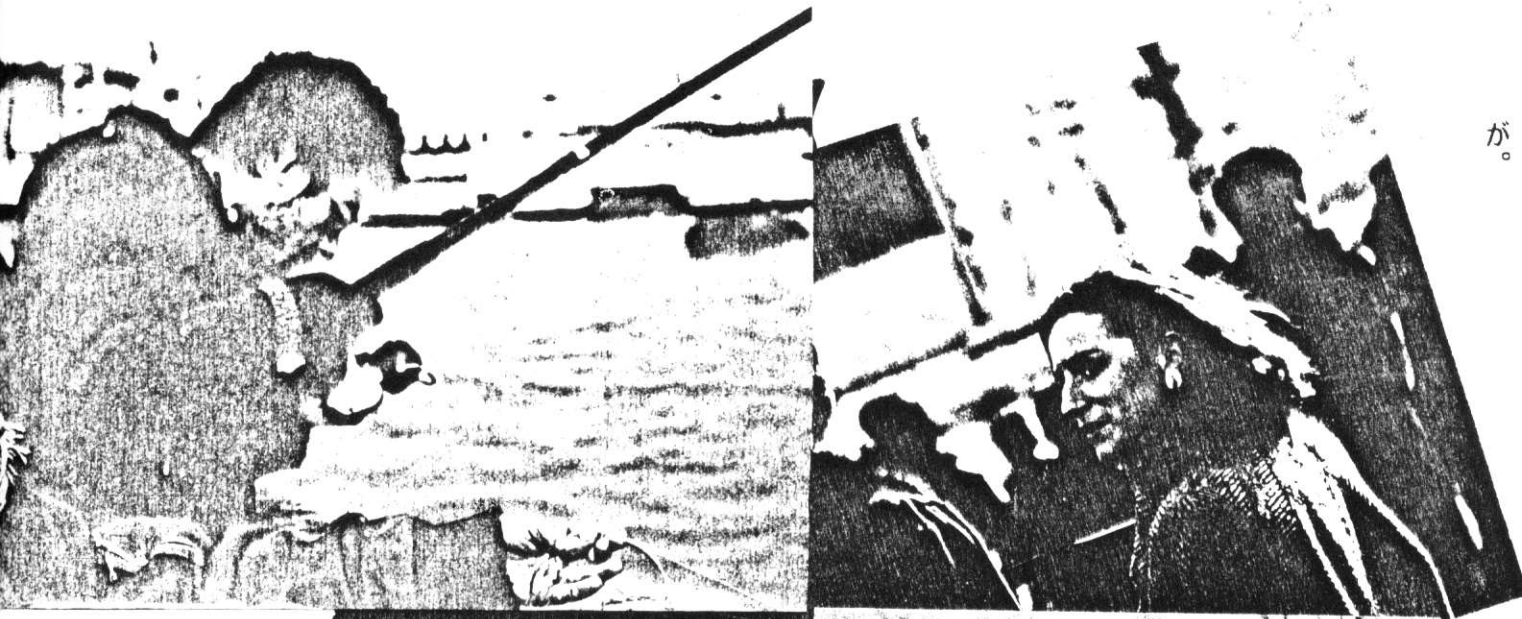
おっさんはニコニコ顔。私は作り笑い。握手して別れた。

いかなあーと、思っても、後悔先に立たず。勉強、勉強と気を取り直して私はピカピカの靴でシレへと向かった。

結果的にはボラれたものの、このおっさんの靴磨きの腕は大したもので、トルコの雪溶け道を毎日歩いても、私の靴はしばらくの間、ほぼ完璧に泥水を跳返して輝いていた。

その後私は旅の間に何度か靴を磨いてもらった。靴磨きの正しい値段を知りたいという気もあった。

トラブゾンの東リゼでは、そこで会った少年達と歩いていたとき、ちゃんと店を構えている14・15歳の少年に呼びとめられた。まだ子供のくせに、いっばしの道具を持っている。おまけにイ



スタンやアンカラでも見ることもなかった、修理用のミシンまで備えている。皮のベレーに皮ジャン。にぎび面がなかなかきままっている。そこは大人も交えて四・五人並んでいるのだが、左右の少年靴磨き等の請われるままに、何枚かシャッターを切った。おまけに私を店に座らせ、一枚撮ってくれる。靴を磨いてもらったなら金はいらないと言う。そのかわり写真を送ってくれと言う。私は帰国してから、彼等に6枚入りの封筒を送った。

アンカラでは、公園で10歳位の子供にやってもらった。50 TLだった。だいたい都会で50。田舎では40というところが相場らしい。もっとも、私の分ったのは流しの靴磨きの値段だけであるが。



## 続 再びイスタンブル・・・メフメット

黒海を出てトラブゾン、ここからバスの旅が始まり、リゼ・エルズルム・ドウバジッド・バン・ディヤルバクル・カイセリ・アンカラ・エスキシェヒール・ブルサ、そして再びイスタンブルに戻ってきた。広いトルコの大地を、あとにして思えばあつという間に駆け抜けてきたという印象だ。短い期間にせよ、都会に生れ育った者の落ち着きのなさか、はたまたそれなりのホームシックか、旅の途中から私は早くイスタンブルに戻りたいと、思うようになっていた。日本に帰りたいという気は起こらなかつたが、イスタンブルには早く戻りたかつた。

そして、イスタンブル。私にとって三度目のこの街は旅の中継地として今回も少しの間いたアテネを除けば、そして私が育ち生活している所を入れなければ、内外でもっとも長く滞在した街となつた。

この雑然としてエネルギーあふれる歴史的街を細かく伝えたい気はするが、へたな自分の文章をうらやんでも始まらない。写真がコピーにしかできぬのが残念だが、一っ・二つの断片でいくらかでも雰囲気伝われば幸いだ。

イスタンブルはやはり物価が高い。無論日本とは比べものならぬにせよ、宿代・飯代はほかにならない。旅行者が多く集まる場所だけあつて、安宿は多くあるが、ちょっと設備の良い所だと、地方で一番良いホテルに泊まるよりも高くつく。中途半端はいけない。かといって外資系の大ホテルなど泊まる気は端からない。そしてどうせならば、五年前泊まった安宿の沢山あるスルタンアフメットでもなく、今回前半に泊まったアクサライでもなく、新市街に泊まりたかつた。私は候補を二つあげ、そのうちの幾らかでも安そうな「ロンドラ」に決めた。

ブルサからイスタンブルに帰り着いた日はもう午後も結構な時間になつていた。長距離バスをアジア側のハーレムガラジで降り、フェリーでヨーロッパ側に渡つてしまえばよかつたのだが、終着のトプカプガラジまでいってしまったものだから時間がかつた。トプカプから市バスに乗つたのだが、なぜかそれはアクサライ止まり。しかたなく乗換え、ガラタ橋前のターミナル行きのある金角湾（ゴールデンホーン）を渡る橋が、近くではガラタかアタチュルク橋に限られ、しかも車の抜けられる道も限られているから、すべてそこに集中してしまう。前半あれほどあつた雪は跡形もなく、ほこりっぽい夏の喧噪と活気をすっかり取戻していた。

ガラタを渡り、ケーブルでレベルを稼いで、ロンドラに向かう。このケーブルというのは・・・港町などどこでもそうだが、土地の高低差が極端にある。それも大抵の場合一気に落っこつていゝる。道はもちろんあるのだがそんな急坂を上りおりするのは疲れる。そんな人のためにつくられている。ここはそれがトンネルになつていて、名称もたしか『トンネル』だった。馬鹿ばかりかと思ふかもしれないが、そうでもなく通勤客が随分と利用している。ちなみに片道25円。荷物を持っているときなど便利なものだ。場所は違ふがポルトガルのリスボンなど街の中にいきなりエレベーターがあつたのには驚いた。どこに行くのだろうと乗つてみたらただ上の道に着いただけだつた。

ロンドラは金角湾側を回りこんでゆく上り坂の途中にある。この道をさらに進めば、イスタンブルで最も繁華な、いってみれば銀座通りのような、イステイクルル通りに続く。抜ければ、もうタキシム広場である。

さて、ロンドラに一泊はしてみたものの、どうも気にいらぬ。思っていたよりも、重厚な高級そうな感じがしたのはそれでいい。それでいて小じんまりとしているのも悪くはない。部屋のドアなどぶ厚い木製で、部屋の中の調度品もどっしりとした感じのダークブラウンにまとめられ、カーテン、カーペットなどは濃い赤である。天井も高い。と、書いているとどこか気にいらぬんだ、いったい。と、言われてしまうが、ほかはともかく、致命的な欠点が二つあった。暗い。と、そして狭い。シングル部屋のせいだろうか、窓の向こうはすぐ隣の壁だし、これでは一日中、日の目を見ることはないだろう。電気は一つしかない。単に寝るだけの所ならばこれでもいいのだろうが、私のように部屋にうだうだといたりする人間にここはちよっと息苦しい。

私はせめてスタンドでも借りられないかと、高慢な感じのマダムに頼んだのだが、その日夕方部屋に戻ってみても届けにきた気配もない。フロントに電話をしても言葉が通じず、らちがあかない。下に降りていってようやくボーイに理解してもらい、他の部屋からはずしたスタンドをもってきてもらったのだが、机の上に置くとコードが届かない。これじゃ書きものが出来ないよとその若いボーイにいうと彼は机の引出しを一つ引っぱり出し、コンセント脇の床にふせて、これでどうだという。これで何か出来るという状態ではない。そして、私は前に点検済みだったから知っていたのだが、この引出しの中には、前の客の忘れものだろうか、なにかの錠剤と共に、ピンクのパンティがしまわれていた。向こうも、あっ！という顔を一瞬見せて、すぐ職業的な顔に戻ってはいしたが、こんな些細なこともあって、私はすでにここを出ることに決めていた。

移った所が「プラザ」。7500TLでロンドラの6600に比べると高くはなったが、一週間いるといたら、ツインの部屋を開けてくれた。しかも珍しく朝飯付きだという。フロントにいた飾り気のない美人がすてきだ。そのせいではないが気に入った。プラザはタキシム広場に近いイステイクルル通りを挟んで、ロンドラとは反対方向だから、むしろマルマラ海に向いている。といっても海の見えるのは一部の部屋だけだ。このホテルから見えない。ロンドラのようにインテリアに凝った様子もなく、昔からの下町のホテルという気取らぬ感じがいい。一泊7500などいまままで払ったことのない金額だが、最後のぜいたく。部屋は広いし、机の他にちいさなテーブルであるし、シャワーは気持ちいいし、最高。

というわけで、以後一週間私はトルコを去る日までプラザから毎日イスタンブルのあちこちに通っていた。



\*

再び戻ってきたイスタンブルはやはり、すっげえ街だと思った。旅の最初には、まだ冷たい空気に包まれて凍えていたこの街は今、堰を切ったように人と物と車・色と匂いと喧騒が渦巻いていた。私はこんなイスタンブルを毎日歩き回った。

プラザを出て、この街でも一番西欧的な建物の並ぶイステイクル通りの排気ガスの中を抜けロンドラに出る道は行かずに、石畳の急坂を下だる。あるいは、プラザへの路地を出たらすぐそのまま人気のない急坂をいっしょに下だってしまう。その二本の道の間にも細かい通りがいくつもある。それらはイスタンブル新市の目印であるガラタのタワーあたりで交差していくのだが、そのうちの一本に出ると、昼間から男供のむらがる娼婦街キズナふちあたる。シヨーウインドウのような明るさの中に若いものからはばーまで、やせからでぶまで、ちびからのっぽまで、西洋から東洋まで。入口から入って一番奥の36号の店まで外をうろつく男供の気持ちとは裏腹にやけにあっけらかんとしてみえる。

坂を下だっただけじゃもうガラタの橋。毎日釣り人をしばらく眺めながら旧市街まで通っていると、まるで通勤しているような気分になる。ガラタ前の露店を見ながらグラランドバザールへ。急坂を覆うように作られたバザール周辺の小道は最後まで判読できなかった。上に出れば、スルトンアフメット通り。トプカプ、ブルーモスクなどのあるスルトンアフメットからイスタンブル大学・アクサライを経てトプカプのガラジへと続く。ここからテオドシウスの城壁が左右に伸びている。

古い歴史と今。西と東。すべてが入り交じった街イスタンブル。

\*

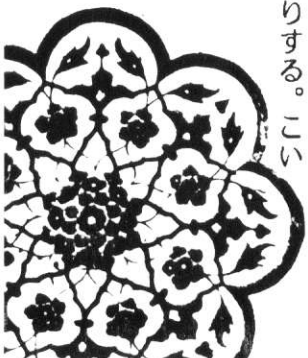
話はイスタンブル最後の一日に飛ぶ。

土産物も買い終えたし、イスタンブルの街もあらかた歩き回った。今日はのんびりしていようと思った。一人には十分すぎるほど広いプラザのツインの部屋も今日限りだ。熱いシャワーを浴び、食堂でいつものトルコパンと、紅茶、白チーズ。

外に出た。ハイデラパシャ・ステイションの近くにうまそうなイシュケンベ屋があった。いつもの急坂を下り、ガラタ橋を渡る。毎日、旧市に足を運んでいると、この道も、通いなれた道という気がしてくる。

イシュケンベの専門店は、言ってみれば日本のラーメン屋のようなものか。気軽に入れて、さっと出て行く。外人観光客などはめったに顔をあらわさない、下町的雰囲気のお店である。

イシュケンベはトルコ人が好む朝食の一品でスープヘトルコ語ではチヨルバンの一種だ。湯がいた羊の胃袋を1cm角位にきざみ、レモンとにんにくを入れた湯の中に入れ煮る。スープといっても身も食べるからパンと合せてそれなりの腹ごしらえにはなる。私もあちこちでだいぶ食べたが、飽きない。しかもそれぞれ見掛けや味が違うのが面白い。スープが白く濁っているのもあれば、ほとんど透明に澄んでいるものもある。どこでもレモンが付いてきて、このみによって味を調節するのだが、店によっては、にんにく入りのお酢があったり、唐がらしがあったりする。こいつは寝起きの頭をすっきりさせてくれる、絶品の朝飯だ。



出際に調理場の写真を一枚せわしなくカメラにおさめ、大学前の広場まで歩く。もうすっかり春になって、裏にボアのついたジャンパーでは汗ばんでくる。

どこか広い所に座って、道行くトルコ人を眺めていようと、思っていたのだが、そうはいかなかった。例によって、靴磨き少年達がひっきりなしに声をかけてくる。別にやってもらわなければならないのだが、こっちも暇なものだから、一回りしてもう一度声をかけてきた少年に、50 TLでいいか？よければやってくれと、つい言ってしまった。

彼はOKと言って始めたのだが、そして始終ニコニコしてやっていたのだが、終わって、50 TL札を一枚渡そうとするとムクレた。受け取らない。これでは少ないと言っているのだ。でも君は50 TLでいいと言ったじゃないか。だから50 TLだ。と私、受け取らせようとする。そんなやりとりで、仲間の子供が二、三人集まってきた。その様子を通りかかった大学生が見つけて、間に入ってくれた。私は事情を彼に説明した。

学生は少年に意見しているようだった。少年の目には涙が浮かんでいる。50 TL札は私の手から学生の手を通して、少年に渡った。涙で光った目が無言で私をニランで、アイツと行ってしまった。まるで、「大人はきたねえや」とでも言っていそうな光だった。

私はなにも、子供相手に我をはるつもりはなかった。トルコの都会では50という相場は私が勝手に決めたものだし、istanbulでは最初にボラレたきりで、この値段は知らない。もしかしたら100が普通なのかもしれない。しかし私としては、彼とトルコ語で交渉し、彼がOKしたことにこだわりたいかった。彼はおそらく、50と行っていても、やれば100位くれるだろうという期待がかなりあったのだろう。普段そうやって多めにくれる客も沢山いるのかもしれない。が、それは私にはわからない。50 TLといえば、日本円でたかだか25円。これを倍の50円払ったところで、なんともない。しかし、この25円に、私は今のトルコでこだわってみたいかった。

まずい雰囲気になってしまったなど、私はしかたなく場所を変えることにした。  
歩道もろくにない大通りをスルタン・アフメットに向かって歩く。

ブルーモスクの前の広場。ここがベンチも多く、いつ行っても、いつまでいても落着けて好きな所の一つだ。

天気がいいせいかベンチが混んでいて、いつもよりずっと端のほうに座った。

ネコが歩いている。ベンチの下をくぐり抜け、アヤソフィアの方に歩いていった。

しばらくして、隣に座った青年が声をかけてきた。

「日本人？」

「そう。」

五分刈りほどの髪の毛の青年はメフメットといった。メフメットは英語を少し話せた。一週間前に兵役を終えたばかりだという。トルコでは20才から二年間、大学生などの例外を除いて、皆徴兵されるといふ。英語はその二年間で覚えたと言ふ。

私の英語も彼と同じようなものだ。勉強した年数ははるかに多いが、大のニガテの語学はさっぱり身につかず、かろうじて旅行するのに困らない程度のしろものでしかない。双方同じようなレベルだから気は楽だが、知っている単語等のエリアが異なるため、しばしば通じない。メフメットも、何か言わんとしているのだが、それが英語にならなくて、この話はヤメだと途中で手を

振って取消してしまうことが何度かあった。

除隊したばかりのメフメットは仕事が決まるまで、フリーの身らしい。少し伸びてきた頭が若々しい。彼は、イスタンブルで見ていないところはないか？どこか行きたいところは？と聞く。私は今日はゆっくりという気持だったので、あまり腰をあげる気もなかったのだが、カパルチャルシには行ったか？とメフメットが聞くので、二・三度聞き返し、いやそこは知らないと言うと、じゃ行こうと誘う。

歩きながら彼に、「ガールフレンドはいるのかい？」と聞くと、ガールがわからない。前から来る女の子をさりげなく指差して、「ガール」というと、ようやくわかった。

「いや、いないよ。なにせ兵隊やめたばかりだから」と、ちょっと照れながらいう。

そして、彼が連れていってくれたところは、なんとグランドバザールだった。

「ここ？」 「そう。」

グランドバザールというのは英語で、カパルチャルシはトルコ語だった。

「ここは見た。」というのと、「じゃ、どこか他に行きたい所はないか？」という。私はこの間、日没の写真を撮りに行ったウシユクダラ近くのサラジャク海岸で会ったおやじさんの話を思い出した。何とかいう小高い丘に行けば、『マルマラもゴールデンホーンもボスフォラスもぜんぶ見える。シップ・シップ・シップだ。』という。このおやじさんは、二十八の時にレスリングでアムステルダムオリンピックに出場し、メダルを取ったんだと、自分の若かりし頃の、筋骨たくましい男がメダルをさげている写真を手帳から取り出して見せてくれた。そのとき手帳を一枚やぶってその地名を書いてくれたのだ。

紙片をメフメットに渡して、「ここ知ってる？」と聞くと、よし行こうということになった。私達はガラタ橋に向かった。

フリーでウシユクダラに渡り、メフメットが人に聞いてバスに乗った。彼もよくは知らないらしい。バスを降り、道を登ってゆく途中で、学校帰りの女の子に出会った。彼が道を聞く。分らないらしい。私が英語で聞いてみた。

「マルマラやゴールデンホーンやボスフォラスがぜんぶ見える所に行きたいんだ」と、

すると彼女は「アーアー」と、大きな声をあげて、それならあそこのことでしょうと言って、教えてくれた。

彼女の家はすぐ近くだった。郊外に家を新築したと思われる、きれいな大きな家で、庭は父親らしい人が、まだ手を入れている最中だった。

メフメットは「かわいかったなあ、あの子は」と、丘に登る途中ではしゃいでいた。

もう少し道を上り、ようやく目当ての丘に着いた。見晴らしはいいのだが、春のもやで遠くは霞んでいる。風が結構寒い。トルコにしてはここはやけに整備された公園のようになっている。

それが日本のこんな場所ならどこでもそうであるような風景だったので私は少々失望した。

アスファルトの駐車場。まだ開いてはいなかったが、飲物などを売るスタンド。真中にしゃれたレストラン。何かトルコではないような近景だった。

メフメットも同じように感じたらしい。そう長くはいないで私達は下りることにした。

帰り道、さっきの彼女の家の前を通ったとき、メフメットに「彼女の家は裕福らしいな」と

いうと、彼は「そう、トルコ人でも、ドイツなどに嫁ぎに行つて金を溜めてきた人間も多いけれど、ずいぶんと辛い仕事をしているようだ。」と言う。

彼女の家がそのようにして建つたかどうかは別として、主にドイツに嫁ぎに出ているトルコ人は多い。一昔前、安い賃金で使える外国人は歓迎されたが、自国に失業者のあふれる現在、国の策として外国人は締め出される方向に向かつている。

私達は再びバスに乗った。「タキシムに帰るのならバスでも行けるよ。」というメフメットの声でちょうど来たバスに飛び乗ったのだが、私にはどこをどう行くのだから分らない。おそらく大回りしてボスフォラス大橋を渡るのだろう。

ヨーロッパ側に入ったどこかでそのバスは終点となり、降りかえることになった。

バスを降りて、私が「腹へつたなあ」と言うと、メフメットは「ごめん、僕があまりへつていないものだから」と、あやまる。

メフメットも今まで私に金を払わせてはくれない。バス代も、フェリー代も。私が『まずいなあ』と思つている間にも彼は店を探している。

バスターミナルの近くにハンバーガーショップがあった。「ここでいいか?」と聞く。

トルコでもこの手のものがちらほら出来てきた。私は本当はこんなアメリカナイズされたものより、ドネルケバパンのほうがはるかに好きなのだが、付近には他に店はありそうになかった。それでもマクドナルドなどよりはるかにポリウムも味もあるハンバーガー2ヶとアイラン。すきっ腹にはうまかった。ここもメフメットが出す。

バスを降りかえ、タキシムに向かう。私はこのままメフメットと別れてしまうのがとても惜しい気がした。私は「ビールでも飲まないか?」と誘つてみた。

前に一度入つたことのあるイステイクル通り中程にある立ち飲みビアホールが雑然としてゐるが、気のおけない店で、安く、気にいつてゐた。

彼はポケットをまさぐつて、「うん、一杯づつなら飲めるよ」などという。

『金のことはいいのに』と私は思つてゐたのだが、向こうはそうではないらしい。

メフメットに次いで歩いてゆくと、はたして彼はその店に入つていった。安くて、いい店というのは誰でも知つてゐる。

大ぶりのタンブラー一杯125TL。イスタンブルはちょっと高い。奥には席もあるらしいが、入口あたりの立ち飲みが一番いい。つまみなどはいらぬ。一杯のビールを時間をかけて、飲み、語り合う。トルコ人は話好きだ。そこらじゅうで話が渦をまいてゐる。

ふと気が付くと、楽器の音が耳に入ってきてゐた。ギターのスチール弦の音に似てゐる。続いて歌声。その方向に目を向けると、中年の男が椅子に座り、マンドリンのような楽器を抱えて、歌つてゐる。よく通る声で、歌に抑揚があり、物語を語つてゐるようにも聞こえる。

トルコの音楽は、流行りの曲でもヨーロッパ・アメリカのとは違う。ジャンジャン・ジャカジャカと、かなりにぎやかな音のエンドレスで、それを聞いても私にはみな同じに聞こえてしまうのだが、これはよその国の人間がみな同じ顔に見えてしまうのと等しい。馴れないものには、まだ小さな違いは擱めず、大ざっぱな特徴だけを捕えてしまうからだ。が、それだけに、トルコ音楽の底に流れるものを感じとれるような気もする。音は華やかなのに、歌に哀しさがある。

私達のいる所からは彼の横顔しか見えない。私はステージでもなんでもない客の中で歌っている男は、ひょっとしたら目が見えないのではないかと思った。そんな気持ちでメフメットの方を見ると、「そう、彼は盲目なんだ」という返事が返ってきた。楽器はウッドのようなものだが、木ではなくスチールらしい。

弦の響きと歌声が、最高の雰囲気を出している。

私は一杯ではもの足りない。「もう一杯飲もうか？」と言うと、メフメットは一杯だけ注文した。金を出そうとすると、いいと押し止どめられ、コインは何回か、私とメフメットの間を往復して、結局再び私のポケットに返っていった。

メフメットはバーテンとちょっと話していた。どうもこの一杯借りたらしい。言葉の中に「アルカダシ」という単語がまじっていた。バーテンが、ちらっと私に一瞥をくれて、離れていった。メフメットはしきりとルメリ・ヒサールにあるおれの家に泊まりにこいと誘う。もう一日早く会ってあげれば。なにせ、明朝の飛行機を予約してある。空港までの時間を考えるときびしい。私はそうしたいのはやまやまだがと、断わった。彼は「飛行機の間は？」と、なおも飽ききらめきれない様子だった。

私は何か礼ができないかなと考え、ホテルに置いてあるバッグの中にある五輪真弓のカセットを思い出した。

「おれ、カセット一本持っているんだけど、ちょっとホテルの部屋に寄ってくれないか？」と、メフメットにいうと、彼は「おれは音楽は大好きなんだ」と喜んだ。

プラザの部屋に戻ってカセットを出すと、彼はちょっとがっかりした仕草をした。私がテープレコーダーを持っていると勘違いしたらしい。テープだけ持ち歩いているというのも変だから、そう思っても当然なのだが。

私は「残念だけど今はこのテープ一本しかないんだ。日本の音楽だけど、よかったら買ってくれ」と言って、彼に渡した。

メフメットはよほどマシンが欲しいのだろう。金は払うから日本からカセットレコーダーを送ってくれないだろうかと言う。

トルコにも、特にイスタンブールなどには日本の製品がかなり出回っている。しかし、カメラ・電気製品などの値段を見ても、日本で売られている値段とそうは変わらない。必ずしも日本で買えば安いというものでもない。ところが、これは単に数字上の話で、実際には日本とトルコの間、四倍の物価感覚の差がある。私が、二万円で買えるものを、彼等は八万円出さないと買えないと思うだろう。

私は「国によって違うから詳しくは分らないが、送るのは出来るけど、もしかしたら後でえらく高い税金を払うことになるかもしれないよ」と言う。「税金か」と彼はつぶやき一瞬だまってしまった。

トルコでどうなのかわからないが、これは実際の話で、まして電気製品では、いつもバッテリーで使うのなりともかくへたをすると無用の長物になりかねない。安請負いはかえって迷惑をかけてしまう場合がある。

あきらめたメフメットに笑顔が戻った。そして自分の首にさげていたネックレスをはずし、私にくれるという。

しっかりした鎖には2cm×5cm位のメタルの板が二枚ついている。手にとって見ると、金属板には引っかけて書いた彼の名前と共にRH+と血液型が刻まれていた。

ブラッド・カードだ。

このようなものをくれるなんてと、私は驚いてしまった。

「これは君にとって大切な記念なのではないか？」と聞くと、彼は「いや、僕にはもう必要のないものさ」という。

それじゃ、二枚あるから一枚だけもらおう。それで十分だといったが、メフメットは、いやもらってくれという。

私はえらいものもらってしまった。何か、彼の命を一部預かってしまったような気がした。たった一週間前までは、彼にとってそれは命綱でもあったはずである。兵役といっても、現在トルコ軍が戦場にいるという事実はないが、それにしてもだ。

メタルはまだ彼の胸のぬくもりが感じられた。

「そろそろ帰ろう」 彼は五輪真弓のカセットをもって立ちあがった。

私は部屋のドアの所まで彼を見送った。別れしなメフメットは私の腕に手をかけ、頬と頬をお互につけるトルコ式の挨拶をした。私達にとって別れの挨拶となった儀式も見慣れてはいたので、驚くことはなかった。

メフメットの生えかけている頬髭が、チクツと感じられた。彼は右左、「ツツ」「ツツ」と口づけの音をさせた。

私はなぜか、ひどく厳粛な気持ちで彼を見送った。





T.C. KÜLTÜR VE TURİZM BAKANLIĞI  
61 İLLET. 70 TL  
ABŞ BEK 375  
LETİ  
916968  
FİYATI: 60 TL.

T.C. KÜLTÜR VE TURİZM BAKANLIĞI  
MÜZE GİRİŞ BİLETİ

HOTEL BAYRAM  
HOTEL BAYRAM  
N. N. A. 11 36 - 11 37 - 21 44 - V. A. N.  
Gimhür İyel Caddesi - 13058

13058 DIYARBAKIR

HOTEL  
PAMUKKALE  
Bar Amerikan Mükemmel Servis ve Modern Kontoruyla Hizmetinizdedir.  
Bar American Good Service and Modern Comfort in Order of Costimers

LATA KUL  
No 7614

527 67 93  
TEL: 522 77 90

Ordu Caddesi Selimp:

Tekbaşlı, Moğanköy Cad. 117 - Tel: 100 10 25  
Beyoğlu - İstanbul  
Türkiye  
Mazara:

BÜYÜK LONDRA OT  
Grand Hotel de London

T.C. MALİYE BAKANLIĞI MİLLİ SARAYLAR GİRİŞ BİLETİ  
DOLMABALICE SARAYI  
200.- TL. MAKBUZ SERİ

ASKERİ MÜZE ve KÜLTÜR SİTESİ  
MÜZE GİRİŞ BİLETİ



Hotel

32 73 - 145

No 0282  
A SERİSİ 1335  
MANİ  
DÖNÜŞ  
Turning



No 4960 200.- TL  
303700  
70 TL.

Hotel Tac

ANKARA ARTIÇ

Adres : 24 31 95 - 24 31 96 - 11 16 63  
Adres : Ulus Çankırı Caddesi No. 35

OTEL DURA

Bilet Değeri	600
Tursaspor	5
Arman hissesi	5
D. V.	60
Bedell	670

チケット類

135 25

# YENI RAKI

TEKEL

# YAKUT

KAVAKLIDERE  
ŞARAPLARI ANONİM ŞİRKETİ  
ANKARA  
Kuruluş 1929



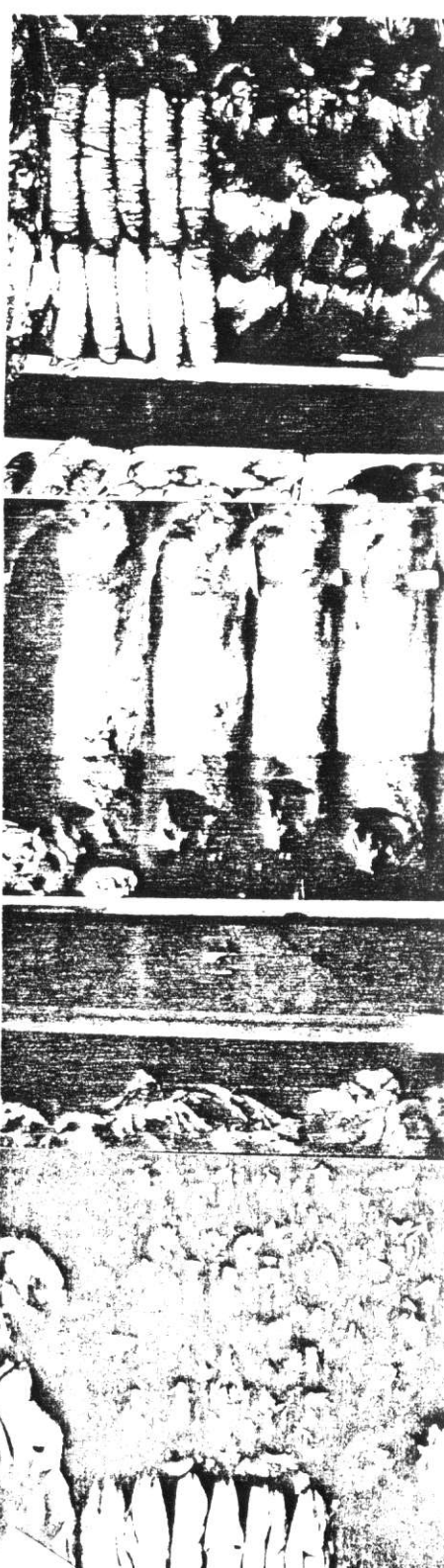
Cl. 70  
Derece: 11-12 Karmaz  
Cal. Karase üzümlerinden yapılmıştır.  
Fiatl. 500 TL.



フライをいれるリール  
...のランフリック  
国内のフライに  
...  
FIATL 130 TL.

カハ (シカ)

リン (シカ)



二度目のトルコの旅をした。

トルコは一九八〇年、カミサンと一緒にあっちこっちを見て歩いた時、気にいった国のひとつだった。そして今度、安くて実の多そうなという虫のいい場所を捜したら、再びトルコだった。

五年位でひとつの国のアイデンティティが変わるはずもないのだが、まだまだ動いている国の、表面にちらちらと現われる変化が面白かった。

夏と冬と、違う季節に旅ができたことはかえって幸運だった。めちゃくちゃまいメロンが食べられなかったのは残念だったが、血のように色の濃い果肉をもったオレンジの味を知った。

外国を一人、旅したというのも初めてだったが、一人旅は人との出会いが多い。こんどはそんな話になった。

食べ物の話などもっと書きたかったのだが、スペースがなかった。中近東は羊の国々。ブルサの町で夕飯を食うつもりで入った店の客が皆ラク（地中海地方の国々で飲まれている水で割ると白く濁る酒）を飲んでいて、私も思わず酒を頼んでしまったのだが（ただしビール）、ここで食ったシシカバが、油みの多い肉の小辺を刺したやつで、ほとんど焼き鳥屋感覚の絶妙なうまさだった。味を伝えるのもまたむずかしいが、ただただ安く、うまく、口に合う。

イスタンブルの話で、それまではイスタンブルと書いていたのを、イスタンブルに改めた。トルコにいたときは気にしてもいなかったから人々がどう言っていたのか思い出すすべもないが、綴りからするとやはりイスタンブルだ。間違いかもしれない。そんなことと同じく、文章の中で思い込み、知識の無さなどからとんだ見当違いのことを知らずに書いているところもあると思う。これを読まれる方で気付いたことがあったら教えてください。

ふと気がついてみると、最近ではテレビのクイズ番組などでもしばしばトルコの国が登場している。トルコ映画も僅かずつではあるが上映され、トルコ内での日本フェアのニュースなど、トルコも少しづつ近い国になって来ているような気がする。

二度行ったのだから三度目もいつか行けるだろう。  
その時私は再び、若きメフメットに会うだろう。



1987・1・11

YAGLI  
BEYAZ  
PEYNIR  
6.00

復刻

東の大地 西の空  
土耳其編 1985

2013年4月8日 web up

© 写真工房 風来舎 半沢清次

<http://furaistrya.web.fc2.com/>

e-mail [furaistrya@m13.alpha-net.ne.jp](mailto:furaistrya@m13.alpha-net.ne.jp)